

伝 二 一条為明筆「源氏拔書」(解題・翻刻)

岩 坪 健

はじめに

源氏物語は江戸時代になると出版され入手しやすくなるが、それでも全巻を所有できたのは限られた人々であった。ましてや中世においては公家・武家など極めて少人数であり、大多数が所持していたのは源氏物語の梗概書であった。それが既に平安末期に作成されていたことは古筆切により知られるし、^(注1)また鎌倉時代写の『源氏古鏡』も存在する。^(注2)とはいえ古筆切は断簡であり、『源氏古鏡』はわずか八帖(桐壺く花宴の巻)しか残存せず、いずれも全貌を窺うことは難しい。完本として現存する最古の作品は、『源氏小鏡』『源氏大鏡』であるが、南北朝期に成立したと推定されており、^(注3)それ以前の実体は不明であった。

ところが、鎌倉後期から南北朝にかけて書写された伝本が存在するのである。それは昭和十四年に刊行された『尊経閣文庫国書分類目録』三四三頁に、「源氏拔書 写(伝一条為明筆)一冊」と掲載されているが、いまだ学会には紹介されていない。惜しいことに三十八帖(桐壺く鈴虫の巻)しか現存しないが、それでも『源氏小鏡』『源氏大鏡』以前の梗概書として貴重な資料であり、ここに全文を翻刻する次第である。

一 尊経閣本の書誌

尊経閣文庫蔵「源氏拔書」(以下、尊経閣本と略称す)の書誌を記す。当本は縦一六・一センチ、横一六・二センチの升型本で列帖装。表紙は黄緑色の布地、見返しは前後とも金銀泥霞引きに金銀箔・銀野毛散らし。表紙も見返しも、後補と思われる。外題・内題とも無し。料紙は鳥の子。遊紙は前に一丁あり、それも含めると丁数は全部で一〇六丁。本文は二丁オから一〇五丁ウまで。一〇六丁オは白紙で、同ウに次の極め書きがある。

此一冊者、権中納言為明卿真跡也。而小松黄門利常卿、就予被求証明之次、備 仙洞叡覽畢。深秘箱底敢莫窓外而已。
槐陰散木源 (花押)

右記によると当写本は、前田利常(生没一五九三〜一六五八年)の時から現代に至るまで、前田家に伝来したことが知られる。利常が「黄門」(中納言)に任じたのは寛永三年(一六二六)であり、同六年に利常と改名、同十六年に致仕して加賀国小松城に隠居した。この当時「仙洞」(上皇)であったのは、寛永六年に退位し、延宝八年(一六八〇)に崩御した後水尾院である。本書を鑑定した人の署名「槐陰散木源」のうち、槐陰とは三公(太政大臣・左大臣・右大臣)を指し、散木は役に立たない人の譬え。その人物は正保四年(一六四七)七月に内大臣に任じたものの、同年十一月に辞退して以来、承応二年(一六五三)二月に六十六歳で没するまで散位(前内大臣正二位)のまままで過ぎた中院通村が該当する。以上によりこの極め書きは、正保四年(一六四七)十一月から承応二年(一六五三)二月までの間に、中院通村が前田利常の求めに応じて記したと考えられる。

通村が鑑定した二条為明(生没一二九五〜一三六四年)とは、為世の孫、為藤の子で、後光厳天皇や足利將軍義詮に古今集を伝授した。為明の真筆には短冊・懐紙(注4)が知られ、彼の筆と推測されるものでは梅沢本古今集が名高く、また伝為明筆としては朝倉切(続古今集の断簡)・暦切(勅撰集の断簡)のほか、源氏物語梗概本の切もあるが、(注5)いずれも尊経閣本とは筆跡が異なる。しかしながら尊経閣本は書風から判断して、為明が活躍した頃に写されたと

見てよからう。

二 他の梗概書との関係

一般に源氏物語を梗概化するには三種類の方法―抄出・補足・要約―が用いられる。たとえば物語本文を抜き出すだけの場合もあれば、抜粋したのを繋ぐために簡単な言葉や詳しい説明を加えたり、あるいは粗筋をまとめたりして、三通りの方法を組み合わせることが多い。尊経閣本を『源氏古鏡』『源氏小鏡』『源氏大鏡』と比較すると、『源氏小鏡』が物語中の和歌を一部しか引かないのに対して、他の三作は全歌を収めるといふ点では共通するが、梗概本文は全く異なる。『古鏡』は登場人物が和歌を詠んだ場面しか抜き出していないため、大事件であっても詠歌がない箇所は略されている。たとえば桐壺の巻では光源氏の祖母の死「a」、高麗の相人「b」、藤壺の入内「c」といった構想上、重要な事項が抜けている。^(注7)一方『大鏡』は、物語本文をそのまま引くことは少ない代りに、和歌がない箇所にも言及している。『大鏡』は三系統(第一〜三類本)に分類され、^(注8)いずれの系統も高麗人「b」は記し、祖母の死「a」は述べず、藤壺入内「c」は第二類本にのみ見られる。

一方、尊経閣本はabcの記述がない点では『古鏡』と一致するが、冒頭本文は異なる。すなわち『古鏡』は一首めの和歌「限りとて」の説明として、光源氏が三歳になった箇所「みこ三つになりたまふとし」から始まるの^(注9)に対して、尊経閣本は物語と同じ「いつれの御時にか」であり、二類本『大鏡』の出だしと共通する。従って和歌中心の『古鏡』と、和歌が詠まれない場面も載せる『大鏡』との間に尊経閣本は位置することになる。『古鏡』は鎌倉時代写、『大鏡』の成立は南北朝期で、尊経閣本の書写時期はちょうど両者の間に当たり、すると尊経閣本の成立時期も『古鏡』より後かというところとは限らないことを次に述べる。

三 『源氏釈』との関係 (1)紅葉賀の巻

尊経閣本と他の梗概書を比較検討した結果、本文が最も似ているのは『源氏釈』の一本である。それは安元元年(一一七五)に没したらしい藤原伊行が著した源氏物語の注釈書で、伝本は非常に少なく、先学により次のように系統分類されている。^(注10)

A 原型本…北野克氏所蔵、伝二条為家(生没一一九八～一二七五年)筆『末摘花・紅葉賀断簡』。

B 第一次一類本…書陵部所蔵、伝貞成親王(一一三七二～一四五六年)筆『源氏物語注釈』所収「源氏或抄物」、抄出本。

C 第一次二類本…冷泉家時雨亭文庫所蔵、鎌倉時代中期写、完本。なお書陵部所蔵残欠本(明石の巻まで残存。近世初期写)は冷泉家本の写し。

D 第二次本…前田家所蔵、伝二条為定(一一九三～一三六〇年)筆、完本。

Aとそれ以外は体裁が全く異なり、B以下は物語本文を抄出した後にその考勘を記すだけで、伊行が注釈を付けない場面には全く触れないのに対して、Aは勘物以外に尊経閣本と同じく物語中の和歌をすべて引き、梗概書の役割も担っている。

池田亀鑑氏はCとDおよび古筆切を校勘され、「前田家本〔D〕と、書陵部本〔C〕と、古筆切とに引く所の物語本文は、そのあげ方が一定せず、或ひは長く、或ひは短く、すこぶる統一を欠いてゐる」ことに着目され、次の結論を導かれた。^(注11)

もし伊行自筆の源氏釈が、最初から、整然と物語本文を引抄してゐたならば、このやうに雑多不統一な体裁にはならなかつたであらう。後人が任意に源氏の本文を抄出したからこそ、このやうなことになつたと思はれる。この点からして、伊行の釈の原本は、源氏物語各巻の本文中に書入れや貼紙の形式でなされた注釈書であつた

のを、後人が思ひ思ひに整理したものと推定される。

しかしその後、新たに『源氏釈』の伝本Bを発見された伊井春樹氏は、BとDの諸本を比較検討の結果、「注記に必要な本文とその前後の場面をダイジェスト化して示すという方法は一致している」ことに注目され、三本いずれも伊行自身により抄出整理されたと論じられた。また諸本により勘物が異なるのは、伊行の「源氏物語研究の進展を反映している」からと判断され、BCDの順に成立したと説かれた。^(注12) 次いでAが公刊され、^(注13) 田坂憲二氏は項目の出入・配列や勘注の本文異同により、Aの注記内容に最も似るのはBであること、また物語の引用本文も、「全体の体裁は異なるものの、北野本「A」の一部が書新本「B」の全文とほぼ完全に一致し、見かけの上では、北野本の抜き書きが書新本のような形となっている」ことを指摘され、それは「北野本のように梗概を述べながら必要に応じて注記を加えたのが原型で、その注記の部分のみ抜き出し、一冊の注釈書として纏められたのが新書本の祖本である」と推定された。^(注14) 以上の考察を踏まえて『源氏釈』の成立過程を、稲賀敬二氏は次のように整理された。

伊行は最初、自分の所持する五十四帖に引歌、引詩などを付箋で加えたり書き入れたりしたであろう。次の段階では、五十四帖の本文のダイジェスト版梗概書を作り、既に書き入れていた勘注を転記し、また新たに勘注の増補も行ったであろう。北野本の形である。その勘注を独立させ、注釈書としての性格を強くしたのが書陵部本など第一次本、前田家本はそれをより精選した第二次本ということになる。^(注15)

さて、尊経閣本には勘物があまりないので(詳細は後述)、物語の本文を『源氏釈』諸本と比較すると、最も近いのはAの北野本である。ただし北野本は二巻しか残存せず、本節では紅葉賀の巻(冒頭から、最初の和歌が詠まれるところまで現存)を取り上げる。その箇所粗筋は、左記の通り。

① 桐壺帝、行幸の試楽実施を決定。

② 光源氏と頭中将、青海波を披露。

③光源氏の舞い姿に対する、弘徽殿女御と藤壺女御の思い。

④その夜、桐壺帝と藤壺、試楽の感想を語り合う。

⑤その翌朝、光源氏、藤壺に手紙を送る。

尊経閣本と北野本は③④を欠き、その間を繋ぐ言葉はない。ちなみに『源氏古鏡』は④のみ無く、やはり③から⑤へ直接続いている。以下、具体的に本文を列挙し、共通する部分に傍線を引き、通し番号(1~11)を付す。たとえば物語の傍線部1は、尊経閣本と北野本の1に各々対応する。

・源氏物語(本文は小学館・日本古典文学全集による)

¹朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、²おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことを口惜しがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむを、あかず思さるれば、³試楽を御前にてせさせたまふ。

⁴源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。⁵片手には大殿の頭中将、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ。花のかたはらの深山木なり。⁷入り方の日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、⁸同じ舞の足踏面持、世に見えぬさまなり。⁹詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝涙をのごひたまひ、上達部親王たちも、みな泣きたまひぬ。¹⁰詠はてて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。(中略)

つとめて中将の君、「¹¹いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。(以下、和歌)

・尊経閣本

¹朱雀院行幸 ²おもしろきたひなれば、³しかくは御前にて ⁴源氏君せいはいは、⁵かたてにこしうとの中将。

をなしきまいのあひまひをもちよにみえぬに、詠なとし給へるさへ、これやほとけの御かれうひんのこゑ
 ならんときこゆ。¹⁰詠はてゝ中將てうちなをし給つる、なみたなかさぬ人なし。頭中將の⁶かたはらなるはなの
 そはのみやまきなり。源し中將まいはて給て、ふちつほ¹¹いかゝ御覽しつらん、よにしらぬ心ちしなからこそ
 とて、(以下、和歌)

・北野本

¹朱雀院行幸は、²おもしろかるへきたひなれば、³試楽は御まへにてせさせ給。⁴源氏の中將せいはいはまい給
 へしとあり。⁵かたてにこしうとの中將⁸をなしまいのあしふみをもちよにみえぬさまなり。⁶はなのかた
 はらのときはきなり。⁷いりひのはなやかにさしたるに、かくのこゑまさりて、ものをもしろきほとに、⁹ゑい
 しなとし給つる、これやほとけのかれうひんのこゑならんときこゆ。¹⁰ゑいはてゝ源氏の中將そてうちなをし
 給へるありさまに、なみたなかさぬ人なし。けんしのきみはふちつほに、¹¹いかゝこらんすらん、よにしらぬ
 こゝちしなからとてなん、(以下、欠脱)

尊経閣本も北野本も、源氏物語から抽出した箇所は傍線部分(1~11)で一致しており、尊経閣本が7を欠くにす
 ぎない。また物語では1~11の順であるのに対して、北野本は67が、尊経閣本も6の配列が、それぞれ本文順で
 ないという点も共通している。そのうえ両本に見られる一節「涙流さぬ人なし」(波線部)は物語には見当らず、
 強いて言えば「みな泣きたまひぬ」^(注16)(二重傍線部)に近い。両作がこれほどまでに合致するのは偶然ではなく、
 両者の祖本が同類であったからと推測される。

四 『源氏釈』との関係 (2)末摘花の巻

北野本の紅葉賀の巻は前掲文しか現存せず、残りは末摘花の巻である。当巻も総じて北野本の方が尊経閣本より

も長文であるため、一字一句厳密に本文を対校するのは難しいが、ここでも先の例「涙流さぬ人なし」（波線部）と同様に、両本に共通しながら『源氏物語大成 校異篇』所収の諸本には見られない本文がある。たとえば次の北野本では、傍線を付した箇所がそれに該当する。なお尊経閣本の本文は、翻刻を参照されたし。

さて、ほとひさしうなりて、このすえつむつたへたりしたいふの命部、あやしう¹かたはらいたきことの、いとほゝゑみて申せば、「れいのいたく、えんなるらん」との給に、「これ」とてたてまつりたる御文を見給へは、いたく²きにあつこえたるかみに、にほひはかりはふかくしみて、うたも³てもよくかきあはせたり。

からころもきみかこゝろのつらければたもとはかくそそほちつゝのみ

傍線1は命婦のセリフ、2は料紙の説明、3は和歌の批評であり、それらに該当する物語本文（青表紙本）を列挙する。

1 「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむも、ひがひがしう思ひたまへわづらひて」と、ほほ笑みて聞こえやらぬを、

2 みちのくに紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり。

3 いとよう書きおほせたり。歌も、（以下「からころも」の歌）

それぞれ河内本・別本に異文はあるものの、北野本の傍線部分と一致または類似した本文は見られない。

このように北野本『源氏釈』と尊経閣本の文章がかなり似ていること、とりわけ独自本文を共有することから、『源氏釈』の編纂方法に関して仮説を提起したい。通説は前述した通り、伊行が勘物を書き込んだ手沢本源氏物語から注釈と全和歌を転記し、「注記に必要な部分は本文をそのまま抜き出し、その場面を説明するために、初めにダイジェストを加える」^(注17)、すなわち『源氏釈』所引の物語本文は伊行所持本により、ダイジェストは伊行の手になると見なされていた。しかしながら北野本『源氏釈』と梗概本文が類似する尊経閣本の出現により、伊行は梗概書

を利用した可能性が考えられる。伊行の頃に梗概本が存在していたことは、伝寂蓮筆の古筆切によりあきらかである(注1参照)。すると北野本『源氏釈』で勘注がなく、詠歌とその状況を説明しただけの箇所は、手元にある梗概書を引用したと推定される。一方、登場人物が歌を詠んでいないため、梗概書では取り上げない場面に注釈を付ける場合には、伊行自ら物語本文を抜き出したりしたのであろう。

この私見を応用すると、北野本で物語が進行する順でない箇所がなぜ生じたか解釈できる。それは二例あり、北野本の内容を箇条書きにすると以下の通りになる。

・一例め

1、光源氏、末摘花に「朝日さす」(二二二^(注18)三)の歌を詠みかける。

2、光源氏が末摘花邸の門を出ようとして、「ふりにける」(二二三八)の歌を詠み、漢詩を口ずさむ。その出典(白文文集)の指摘あり。

3、末摘花邸の庭の様子。および引歌の指摘(二二三14)。

4、「さて、ほどひさしうなりて」で始まる、宮中での出来事。

・二例め

1、命婦、宮中にて光源氏の傍らで「くれなるの」の歌を詠む(二二六6)。

2、光源氏、末摘花への返歌「逢はぬ夜を」(二二七6)を詠む。

3、2の歌を命婦に渡したとき、光源氏が口ずさんだ一節に関する出典の指摘(二二六13)。

4、「又すゑつむはなのもとへ、としかへりて」で始まる、末摘花邸での出来事。

二例とも2と3を逆にすると、本文順になる。両例の共通点を挙げると、

・1と3は同じ場面で、4のみ異なること。

・登場人物の詠歌が1と2にあり、3にはないこと

・3に、注釈が付いていることである。

以上の点から、次の推測が成り立つ。伊行が注を付けた3の場面は登場人物の和歌がなく、伊行が利用した梗概書には省かれていたため、伊行自ら物語を抄出して勘物と一緒に『源氏釈』に加える際、1の次に置くと本文順になるが、むしろ2の後に入れた方が自著では粗筋がわかりやすくなると伊行は判断したのであろう。なぜならば一例めは、2が「かどあくるをきな」という「場面転換の言葉」^(注19)から始まるので、そのあとに同じ屋外を描いた3が置けるから。また二例めは物語では光源氏が返歌を手渡した3の場面のもと、それを末摘花邸で女房たちが見たときに初めて歌の内容が紹介される(2の条)が、配列を逆にして返歌の本文を先に披露し(2)、それを受けて「この御返事かきて、たいふの命部にとらせ給とて」(3の出だし)とした方が、続き具合がよくなるからである。

以上により『源氏釈』所引の本文は、すべて物語から引かれたのではなく、梗概書も利用されたと推定される。従って本書に基づき、伊行所持本の本文系統を考察する際は注意を要する。今までは注釈書の掲出本文は源氏物語に拠り、それを調べれば作者が用いた写本の本文系統が識別できると見なされていた。しかしながら、中世に成立した四種の古注釈(『異本紫明抄』『仙源抄』『類字源語抄』『師説自見集』)はいずれも物語からではなく、勘物を転記した資料から物語本文も引いているため、引用本文に基づき作者所持本の系統を判断する従来の方法は適用できない。^(注20)北野本『源氏釈』の場合は注釈書からではなく、梗概書から転載されたのである。

すると北野本所収の物語歌も、梗概書による可能性が考えられる。そこで当本に残存する八首の本文系統を、まず『源氏物語大成 校異篇』で調べると、青表紙本系でないのは次の七例である。以下、北野本、『源氏物語大成 校異篇』の底本(大島本)、大島本と異なる本文の順に列挙する。なお諸本の略号は、『源氏物語大成』による。

- (1) いひなから (末摘花二二四二)、しりなからー「青表紙本」いひ(注21)なから横
- (2) まさる (同二一六一)、そふるー「別本」まさる御
- (3) たるひも (同二二二三)、たるひはー「河内本」たるひも河ー「別本」わゆ(注21) (たるひ) も陽
- (4) なとて (同二二三三)、なとかーなとて「別本」陽
- (5) ぬる(注21) (同二二三三)、ぬらすー「別本」ぬるる御
- (6) まほ(注21)ゆ(注21) (同二二五三)、そほち (諸本、異同ナシ)
- (7) くち(注21)す(注21) (同二二六六)、くたす (諸本、異同ナシ)

(3)(6)(7)の北野本の傍書は別人が書き入れたように見えるが、(6)(7)は元の本文が誤写の可能性があるので考察から除くと、(2)(5)は御物本と、(3)(4)は陽明家本と一致する。和歌に限らず『源氏積』(書陵部本・前田家本)の物語本文は、陽明家本に近似するという指摘(注22)が、北野本にも当てはまる。

次に右記の七例を、梗概書の本文と比較する。稻賀敬二氏は十八件に及ぶ源氏物語の梗概書類を取り上げ、その中の物語歌を校合された結果、「約四分の一の歌に梗概書の諸本が河内本、別本と共通の異文が見出される」ことから、「梗概書のみに見えて、大成所収の諸本に全く類例の見られぬ異文の多くは、今伝わらぬ別本系統の一本に存したものと推定される」とされた(注23)。その一例として『源氏大鏡』では、「第一類本が別本系統の一本を台として梗概を記しており、その中には伊行の源氏積や無名草子などと部分的に一致する異文が見える」と指摘された(注24)。同氏が調査された十八件の校異は須磨の巻まで発表されており、それを借用して北野本『源氏積』を対校すると、前掲の七例のうち(4)は五件の梗概書と、(5)は三件と一致する。一方、尊経閣本は(5)が「ぬる(注25)」(らす)「(書き入れは他筆か)である以外は、青表紙本系統である。すると青表紙本との異同は北野本よりも少なくなるが、他の箇所もそうであるかどうか次節で検討する。

五 尊経閣本の和歌の本文系統

源氏物語には和歌が全部で七九五首あり、尊経閣本は鈴虫の巻までしかないため計五二五首、そのうち稲賀敬二氏が調査された須磨の巻まで（注25参照）の二一七首を取り上げる。なお尊経閣本には見せ消チにして、あるいは見せ消チにせずに異文を傍らに書き込んだ例が数多く見られるが、書き入れの中には他筆かと思われるものもあるので、以下の考察では除く。尊経閣本が『源氏物語大成 校異篇』（以下、『大成』と略称）の底本と異なる箇所を抜き出し、一首に二ヶ所あれば二例と計算すると、一〇五例に及ぶ。そのうち稲賀氏が調査された伝本（『大成』と十八件の梗概書類）に見られない、尊経閣本独自の本文は四九例もある。但しの中には尊経閣本の誤写と思われるものや、助詞が一字違うだけのもの（たとえば「涙の」「涙そ」、「大宮人の」「大宮人は」等）も含むが、それらを除いた大きな異同のうち、三例を列挙する。

いとけなきはつもとゆひによろつよをちきるころはむすひこめつや（桐壺二六一）

見しゆめをあふよありやとなけくまにめさへあはてもほと（つそらもへにける）のふるかな（帚木七四一〇）

身はか
はかなくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけはなれし（須磨四〇三一四）

『大成』所収の諸本と十八件の梗概書類は、いずれも一首めの傍線部が「なかき」で、第二・三首は書き入れの方と一致する。なお他の和歌においても、傍記や合点記号（〽）付きの方が殆どの場合、青表紙本系統である。（注26）

次に、尊経閣本の本文が『大成』に見当らず、梗概書類に見られる例を探すと十四箇所あり、そのうち三首を引用する。

山かつのかきを（みある）なりともおりくにあはれはかけよなてし（略イ）このはな（帚木五六一四）

しもかれのまかきにのこるなてしこをわかれしあきのかたみとそみる(葵三一一三)
 をく山のむろのとはそをまれにあげてまたみぬ花のいろを見るかな(若紫一六七二)

三首とも書き入れがあり、それは『大成』諸本と、また元の本文は梗概書類とそれぞれ一致する。^(注27) 詳しく見ると、

二首めの初句は梗概書により「霜かれの」「草かれの」と「冬かれの」に分かれる。一首めの元の本文は書陵部蔵『源氏小鏡』^(注28)と、三首めは六件の諸書と合い、その中には『風葉集』も含まれる。

『風葉集』は物語歌撰集で、約二百種の作り物語から歌を選び、古今集を模して分類配列したものである。従来は物語から直接歌を引いたと考えられていたが、その中の一首が尊経閣本の本文と合致することから、『風葉集』の編纂に尊経閣本のような資料も利用されたという仮説が成り立つ。源氏物語に関しては、尊経閣本のように詠歌を全て収めた梗概書(注1参照)や、和歌が詠まれた場面を詞書のように記した歌集が作られ、^(注29) それらが『風葉集』の成立した文永八年(一二七一)以前に存在していたことは、古筆切により明らかである。よって『風葉集』編集の際、源氏物語のように梗概書や物語歌集がある作品は、わざわざ物語から和歌を抜き出して詞書を作成する手間が省ける。よって『風葉集』所収の源氏歌で、青表紙本でも河内本でもない本文は、通説によると別本になるが、私見では梗概書類から転載した可能性も考えられる。

『風葉集』の撰者には藤原為家が有力視されているが、^(注30) その父、定家も物語歌を左右に結番した『物語二百番歌合』を選定している。従来は本作も物語から直に和歌を引いたと見なし、青表紙本を校定した定家の手になるにもかかわらず、河内本や別本が混じるため、その矛盾を解決する説が提唱された。たとえば本書の成立は、『明月記』(定家の日記)に記された青表紙本完成の記事よりも二十年ほど早いことに基づき、定家が『物語二百番歌合』に使用した源氏物語は青表紙本以前のものであり、「現在の青表紙本を遡るひとつの手懸りとなりうる本」と見る説、^(注31) あるいは類似歌による「記憶の混同、覚え違いによる誤写」と推測する説がある。^(注32) その他の理由として自説を付け

加えると、定家が使用した梗概書か物語歌集(注33)が青表紙本系統でなかったからという推定も成り立つ。伊行が北野本『源氏釈』を制作した際、物語のほかには尊経閣本のような梗概書も利用したと見なす仮説が、『物語二百番歌合』や『風葉集』にも当てはまるのである。

六 尊経閣本の巻名・巻数

さて尊経閣本は各巻頭に巻名を記すが、その中に珍しい例が見られる。それは若菜の巻で、上巻の見出しは「甘わかかな」、下巻は「わかかなの下」で、これだけならば他書と異ならない。ところが上巻の途中に「はことり」、下巻の中段にも「もろかつら」という小見出しがあり、巻の後半を別名で呼ぶのは他に類を見ない。その二語は『河海抄』も、両巻の冒頭に取り上げている。

第二十若菜上

巻名

こ松原すゑのよはひにひかれてや野へのわかかなも年をつむへき

一名はこ鳥、みやま木にねくらさたむるはことりの歌故也、当流不用之

若菜下

此巻一名もろかつら云々、おち葉をなに、ひろひけんの歌による歟、当流不用之

『河海抄』の場合、問題の言葉は巻の異名を指すにすぎない。また定家自筆本『奥入』も、若菜下の巻末に「わかかなのまき一の名 もろかつら」とあり、これも下巻全体の別称である。

他の巻で尊経閣本のように一巻を二分して、各々呼び分ける体裁は、自筆本『奥入』の桐壺の巻頭に見られる。

このまき 一の名 つほせんさい

或本分奥端 有此名 謬説也

一卷之二名也

「壺前裁」という言葉は、桐壺帝が亡き更衣を慕っている場面の一節、「御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを、御覧ずるやうにて」による。定家は壺前裁を桐壺の巻の異称と考えたが、当時、本巻を「端」(前半)と「奥」(後半)に分け、前者を桐壺、後者を壺前裁と呼称する説があったらしい。すると尊経閣本のように若菜上巻の後半を「はことり」、下巻の後半を「もろかつら」と称する説も存在したであろう。「はことり」の冒頭は明石中宮の皇子出産であり、「もろかつら」は柏木・女三の宮の密通から始まり、いずれも重大事件の前後で一巻を区分している。

次に尊経閣本で巻数の付け方を見ると、当時の慣習で並びの巻を用いており、『源氏釈』や『紫明抄』と比較すると一ヶ所だけ異なる。それは尊経閣本では「廿二 よこふる」「廿三 すゝむし」とあるが、他書では鈴虫を横笛の並びとし、次の夕霧を第二十三巻としている。残念ながら尊経閣本は夕霧以下を欠くため、「廿三 すゝむし」が誤写かどうか判然としない。

七 尊経閣本の注記内容

尊経閣本には注釈が多少あり、ここでは他の作品と関連する例を二つ問題にする。一つめは、光源氏が軒端萩に和歌を送った場面(夕顔一四二二)である。

いつもちのかたゝかへにて見そめ給へりし人は蔵人の少将をなんかよはすときゝたまひて(下略)

光源氏が軒端萩に出会ったのは「いつもちのかたゝかへ」(傍線部)の折とあり、帚木の巻では「源氏いよのすけ

といふ人のもとにかたゝかへにわたり給へるに」と記すので、伊予介邸は「いつもち」にあったことになるが、『源氏物語大成 索引篇』には「いつもち」（出雲寺、出雲路）という言葉は無い。物語には「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家」とあり、その川については定家が『奥入』で京極川と解釈した説が後世に受け継がれた。その子、為家が著したと伝える『源氏紫明抄』（素寂の『紫明抄』とは同名異書）には、「中川の宿京極川の上御書也出雲寺のあたり也」とあり、尊経閣本の内容と一致する。『源氏紫明抄』は為家の著書に仮託されているが、貞治三年（一二三六四）頃に成立した私撰集『六花集』の書名とその和歌が引かれているので、それ以後に作られ、一条兼良が文明二年（一二四七〇）に写している。

二例めは須磨の巻で、登場人物の一人「はなちるさと」の傍らに書き込まれた「大臣ノマコナリ」である。物語では花散里は桐壺院の女御麗景殿の妹としか語られず、祖父や父の記述はない。しかし朱雀院の女御にも麗景殿がおり、その人は右大臣の孫で、弘徽殿や朧月夜の姪にあたる。そこで二人の麗景殿が混同され、花散里は大臣の孫と誤認されたのであろう。同じ記載が大島本古系図にもあり、これは他の系図には見られない大島本独自の誤謬と指摘されている。(注35) また同じ記述が『源概抄』（『源氏小鏡』の一本）にもあり、大島本との関係に関しては、『源概抄』の作者が物語本文を誤読したために偶然一致したというよりは、源侍従上の注記によっても分かるように、作者は大島本と同一系統の古系図を用いて書き入れたことによると見る方が妥当であろう。(注36) と推定されている。すると当時、この誤解が伝播しており、尊経閣本もその影響を受けたと考えられる。

花散里を大臣の孫とする解釈は、物語の内容と異なるが古系図に見られ、尊経閣本や『源氏小鏡』に引かれたように、『源氏紫明抄』に使われた「出雲寺」という語句も物語には出てこないが、尊経閣本の梗概文に使用されている。よって尊経閣本は、源氏物語の歌集や梗概書であると同時に、中世の源氏の解釈を載せる貴重な資料と言えるよう。

(注)

1、小松茂美氏『古筆学大成』第二十三卷(講談社、平成四年)に、源氏物語(梗概本)切が十二件収められており、その中で最も古いのは、十二世紀半ばに写されたと推定される伝寂蓮筆である。

2、『鑑古註續集』(『天理図書館善本叢書 和書之部』第五十八巻、八木書店、昭和五七年)に、影印と解題(片桐洋一氏執筆)が収められている。

なお『源氏古鏡』に似た作品が東京帝国大学国語研究室にあったが、関東大震災で焼失した。橋本進吉氏「国語研究室焼失主要書目録」(『国語と国文学』創刊号、大正一三年五月)には、「源氏歌集 三帖 胡蝶装の冊子で、甚古色がある。古筆家が為氏筆と定めて居るのは信じがたいとしても、恐らくは鎌倉末期を下らないものであろう。源氏物語中の歌を、その前後の文と共に抜萃したものである。」とある。

3、稻賀敬二氏『源氏物語の研究鑑』第二章第二節(笠間書院、昭和四二年)。寺本直彦氏『源氏物語受容史論考 正編』後編第七・八節(風間書房、昭和四五年)。伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』第二部第一章第一節(桜楓社、昭和五五年)。

4、為明の書は、『日本書蹟大鑑』6(講談社、昭和五四年)に収められている。その中の短冊は、康永三年(一三四四)に足利直義が高野山に奉納した『宝積経要旨』(前田育徳会蔵)の紙背にある。また懐紙は、元徳二年(一二三〇)に詠まれた和歌詠草で、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』(改訂新版、九〇〇頁、明治書院、昭和六二年)にも紹介されている。

5、注1の著書、所収。

6、ただし尊経閣本は次の二首を欠くが、脱落であろう。

(1)松風の巻、「すみなれし」歌の次。

いさらるははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる (本文は小学館・日本古典文学全集による)
 (2) 真木柱の巻、「なかめする」歌の次。

思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花

いずれも詠者は光源氏で、(2)は独詠歌。(1)は前の歌に対する答歌。欠落に気づいた古人が、二首が置かれるはずの行間の上に墨で○を付けている。

7、田坂憲二氏「天理図書館『源氏古鏡』について」(『中古文学』28、昭和五六―一月)、および注2の片桐氏の解題、参照。

8、注3の稲賀氏著書、第三章第一節。

9、一類本『源氏大鏡』は「桐壺は、大内四十八殿のそのひとつなり」、三類本は「きりつぼは、五舎の其一つ也」で、系統により本文が異なる(注3の稲賀氏著書、一八四頁)。

10、伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』第一部第一章第二節(桜楓社、昭和五五年)。

田坂憲二氏「北野克氏蔵『末摘花・紅葉賀断簡』について―『源氏釈』原型本の推定―」(『文学研究』79、昭和五七年三月)。

なお『源氏釈』の伝本は他に、都立中央図書館本と吉川家本源氏物語巻末の勘物があるが、これらは「第三次本とも呼ぶべき増補本」の系統に後人が手を加えたと考えられるので(伊井氏の前掲書)、本稿では取り上げない。また古筆切は、田坂憲二氏が十二葉を集めて考察された(『源氏釈』の古筆資料について、「香椎瀉」43、平成一〇年三月)。

11、池田龜鑑氏『源氏物語大成 研究資料篇』三八頁(中央公論社、昭和三十一年)。

12、伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』二六頁(桜楓社、昭和五五年)。

- 13、北野克氏編『源氏物語抄・「末摘花」断簡』(勉誠社文庫83、昭和五六年三月)。
- 14、注10の田坂憲二氏論文、一八六頁。
- 15、稻賀敬二氏「源氏物語初期古注釈の問題」(古筆学叢林3『古筆と源氏物語』一四頁、八木書店、平成三年)。
- 16、この一節は『源氏物語大成 校異篇』所収の諸本にも異文はない。ちなみに『源氏大鏡』には、「みな人、涙(を)おとし給ふ」(第一〜三類本、共通)とある。
- 17、注12の著書、三七頁。
- 18、()内の漢数字と算用数字は、『源氏物語大成 校異篇』の頁と行数を示す。
- 19、注10の田坂憲二氏の論文(『文学研究』79)、一九一頁。
- 20、拙著『源氏物語古注釈の研究』第一編(和泉書院、平成二年二月)。
- 21、「いひ(しり)」は、「いひ」を見せ消ちにして「しり」を書き入れたことを示す。以下も同じ。
- 22、注12の著書、四一頁。
- 23、稻賀敬二氏『源氏物語の研究』(笠間書院、昭和四二年)四二頁。
- 24、注23の著書、一九五頁。
- 25、稻賀敬二氏「源氏物語梗概書にあらわれた中世の流布本文研究―源氏物語和歌異文一覧 1―」(『広島大学文学部紀要』24巻3号、昭和四〇年三月)。なお紅葉賀の巻までの主な異同は、注23の著書(三七〜四二頁)にも再録されている。
- 26、合点記号は計四〇例あり、ハ付きの本文は全て青表紙本系統である。また見せ消ちにして異文が書き込まれた場合、すべて元の本文は非青表紙本で、傍記が青表紙本系である。一方、見せ消ちにせず傍らに異文が並記された場合も、両方とも青表紙本系のが四例あるが(ただし傍記は、肖柏本など一部の写本とのみ一致)、それ以

外は傍書の方が青表紙本系である。

- 27、引用した三首のうち、第二・三首は注25の論文に引かれ、また注23の著書、三三頁にも再録されている。
- 28、当写本は伊井春樹氏の分類によると、古本系統に属する（注12の著書、八三五頁）。
- 29、注1に五件、所収。そのうち最古のものは、十三世紀初頭に書写された伝後京極良経筆切である。
- 30、樋口芳麻呂氏「風葉和歌集序文考」（『国語と国文学』昭和四〇年一・二月）。後に同氏著『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』（ひたく書房、昭和五七年）に再録。
- 31、安宅克己氏「青表紙本源氏物語成立以前の定家本」（学習院大学「国語国文学会誌」26、昭和五八年二月）。
- 32、上野英二氏「源氏物語の享受と本文―物語二百番歌合所収本文をめぐって―」（『国語国文』昭和五九年一月）。後に同氏著『源氏物語序説』（平凡社、平成七年）所収。なお、その論文の注25では中世の梗概書類にも言及して、『後百番歌合』の本文が源氏物語の諸本と異なり、源氏小鏡・風葉和歌集などと一致すると指摘されている。
- 33、定家は後鳥羽院から、「物語之中歌可書進、^二撰^一」と命じられている（『明月記』元久二年十二月七日）。また同書の建永二年五月二・四日には「賜源氏集一帖、其歌可書進由有仰事」「又給源氏集下帖書進」とあり、この「源氏集」は尊経閣本のようなものかもしれない。なお定家自筆本『物語二百番歌合』の奥書には、「此歌先年依^二後京極殿仰^一、給^二宣陽門院御本物語^一所^二撰進^一也。」とあり、この「御本物語」の中には物語歌集や梗概書が含まれていたと考えられる。以上の用例は、寺本直彦氏『源氏物語受容史論考 続編』（風間書房、昭和五九年）三二八・三三七頁、および川平ひとし氏「物語二百番歌合」（『体系物語文学史』5所収、有精堂、平成三年）の注10による。
- ちなみに定家四十代前後の筆跡と推定される、源氏物語の和歌を抜書した断簡がある。詳細は田中登氏「定家筆源氏物語和歌抜書切」（『むらさき』34、平成九年一二月）参照。

- 34、『源氏紫明抄』は注20の小著に、全文を翻刻した。
- 35、小山敦子氏「源氏物語古系図の実態」(国文学 解釈と教材の研究「昭和三五年四月」)。
- 36、注12の著書、八二七頁。

〔付記〕末筆ながら、貴重書の閲覧および掲載を許可していただいた尊経閣文庫に厚く御礼申し上げます。また当写本の翻刻は、石井弘佐代氏と好田喜美子氏にお願いした。なお本稿は、平成十一年度特別個人研究費助成による。

凡例

一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

- (1) 底本の旧漢字・異体字・略体は、通常の字体に改めた。
- (2) 句読点を付け、会話・心内語・手紙文などは「」で括った。
- (3) 明らかに誤写と思われる箇所には、右側行間に(ママ)と記した。また推定した文字を(カ)の中に入れた。
- (4) 見せ消ちの記号は三種類(「・」「々」「ヒ」)あるが、翻刻では一種類に統一した。
- (5) 一度書いた文字を擦り消して、あるいは消さずに、上に重ね書きした箇所が散在するが、元の文字は誤写か判読不能であるため翻刻していない。
- (6) 底本には、朱筆で書かれた文字や記号(合点など)はなく、すべて墨筆である。

一 きりつほ

いつれの御時にか、女御更衣あまた候給中に、いとやむことなききはあらぬか、ときめき給ありけり。ちゝの大納言はかなくなりて、母きたの方はかりそのし給ける。をとこ宮さへむまれ給にければ、いとゝもろこしのためしにもおとらす、御あさいにあさまつり事もいかゝなど、よ人も申方々もやすからぬ事に思ひあへりけるけにや、れいならてまかりいてなむとしたまひけれど、御かとゆるしたまはさりけり。五六日にいとよはくなり給にければ、かきりある事にていて給よ、更衣、

かきりとてわかるゝ道のかなしきにかまほしきはいのちなりけり

みやす所うせ給てのち、源氏の君、むは北のかたの御もとにをはするに、命婦を御使にて、うへ、

みやきのゝ露ふきむすふ風のをとこはきかもとを思ひこそやれ

命婦、御返とりてたつほと、風をかしうふきて虫のこゑをしみかほなるに命婦、

すゝむしのこゑのかきりをつくしてもなかきよあかすふるなみたかな

北のかた、御返えいひやらす、

いとゝしくむしのねしけきあさちふに露をきそふる雲のうゑ人

みやきのゝ御返、

あらし風ふせきしかけのかれしよりこはきかもとそしつ心なき

命婦のをくりものに、みやす所のきぬなど、とらせ給たるを御覧して、うへ、「なき人のありかたつねいたしたりけん、しるしのかむさしならましかは」と、おほしめさるゝもかなし。

たつねゆくまほろしもかなつてにてもたまのありかをそことしるへく

源氏の君いみのほとは、さとにをはするをおほしやりつゝ、月かけをなかめさせ給て、うへ、

雲のうゑもなみたにくるゝ秋の月いかてすむらむあさちふのやと

源氏のきみ元服したまふに、ひきいれの大_ニ臣の御むすめ、やかてこのついでにと、けしきはみたまふ。御さかつきのついでに、うへ、

いとけなきはつもとゆひによろつよをちきるこゝろはむすひこめつや
と御心はへありて、おとろかさせ給。御返、をとゝ、

むすひつるこゝろもふかきもとゆひにこきむらさきのいろしあせすは

二 はゝき木

源氏の中將、うちの御物いみにこもりたまへるに、はれまなきなかあめのころ、「これかれ、をかしかりけむ事かたり給へ」とありければ、こしうとの中將、右馬頭、藤式部のせうなど、女のこゝろはへのよきあしきさたむるに、むまのかみ、かよひける女の、ものねたみをいたうして、をよひをくひきりたりければ、いたうゝらみて、「いまは、こし」など申て、むまのかみ、

てをゝりてあひみし事をかそふれはこれひとつやは君かうきふし

「ゑ、うらみし」なといひ侍れは、さすかにうちなきて、

うきふしを心コノひコノとつかそへきてこや君かてをわかるへきおり

そのころ、またかよひ侍し所に、たえまありてまかりたりしに、またしのひてかよふおとこありけるか、ふゑをふきつゝまうてきたりけるに、女のわこむをかきあはせけるを、このおとこいたくめてゝ、まくをゝりて、すのもとによりて、

ことのねもツキきくもゑならぬやとなからつれなき人をひきやとめける

返、女、

こからしにふきあはすめるふえのねをひきとゝむへきことの葉そなき

「かくよみかはしけるをみて、まからすなりにき」なとかたるに、中将のたひになりて、「しれものかたりし侍らん」とて、わさとならずかよひ侍し女、心やいかゝありけん。いみしくたのみて、めつらしきほとなるをも、いひうらみ侍らさりしか、ゝらうして、ひさしくまからすなりにしかは、おさなき人にことつけて、なてしこの花につけて、

山かつのかきほなりともおりくにあはれはかけよなてしこのはな

やかてまかりて中将、

さきまする花はいつれとわかねともなほとこ夏にしく物そなき

「ちりをたに」など、なてしこをはさしおきて、まつをやのこゝろをとる。返、女、

うちはらふ袖も露けきとこ夏にあらしふきそふ秋もきにけり

「式部かたひにそ、けしきある事はあらむ。申せ」とせめらるれば、また文章生に侍し時、あるはかせのむすめにいひより侍りて、ひさしくまからさりしころ、たよりにたちより侍れば、ものこしにて、「月ころ風病をもきたえかねて、こくねつのさう薬をふくして、いとくさきにより、えたいめむたまはらぬ」といへるに、たゝ、「うけ給はりぬ」とはかりにて、たちいて侍るに、「猶たちより給へ」とたかやかにいふを、しはしやすらひ侍しも、すちなければ、

さゝかにのふるまひしるき夕くれにひるますくせといふそあやなき

「いかなることつけそや」といひもはです、はしりいつるに、をひつきて返、女、

あふことのよをしへたてぬ中ならはひるまもなにかまはゆかゝらまし

源氏いよのすけといふ人のもとに、かたゝかへにわたり給へるに、をくのかたに、をさなきちこのこゑにて、「いつくに、をはしますぞ。」「こゝに」といふ。これぞ、きたのかたなめる。源氏れいのきゝはなちたまはぬくせにて、こゑをしるへにていりたまひぬ。えもいはす心つよきを、みならひ給はず。うらみ給て、

つれなきをうらみも^あはてぬしのゝめにとりあえぬまでおとろかすらん

御返、女、

身のうさをなけくにあかてあくるよはとりかさねてそねもなかれける

なを此うつせみ、こゝろつよく夢のやうなりしをおほしいつるに、わすれかたくて、ありしこゑのちこして、

みしゆめをあふよありやとなくまにめさへあはても^{そこ}ほと^ものふる^へかな

「ぬるよなけれは」とある御かきさま、めもとまりぬへけれは、きりふたかるこゝちして、なみたのをつるを、このちこのみるらんもはつかしうて、よろつ思みたれてふし給へり。又のひ、こ君めしてとはせ給へは、「御文みるへき人もなし、ときこゑよ、なと申す」と申せは、うちよりのたよりにをはしましたるに、この女わたとの中将といふかつほねにうつろひぬ。こきみをつかはして、いかにたはかるらんと、うしろめたうまちふしたまへるに、ふようなるよしをきこゆれは、「あさましうめつらかなりけり^{るカ}。こゝろのほとかな。みも、いとほつかしうこそなりぬれ」とて、とはかりうめき給て、

はゝきゝの心をしらてそのはらの道にあやなくまとひぬるかな

「きこえむかたこそなけれ」と、のたまへり。女もさすかに、まとろまれさりければ、

かすならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらずきゆるはゝきゝ

ならひ うつせみ

この女あなちにごゝろつよきを、せめておほしたはかりておはしたるに、きぬをぬきすてゝかくれにけり。いとつらう、ゝしとおほす。かたはらにわかき人、ゑしらてねたりける。これを見すてかたうて、なこりなるも、さすかあはれなり。いよのすけかむすめなりけり。かのうつせみのもぬけをたにとおほして、かへらせ給て、

うつせみのみをかへてけるこのもとなをひとからのなつかしき哉

返、

うつせみのはにをくつゆのこかくれてしのひくゝにぬるゝそてかな

ならひ ゆふかほ

源氏めのとこのわつらふところへ、をはするみちに、ちいさきいゑの、はしとみなんと、しわたしたるをみいれ給へは、しろきはなの、をのれひとり、ゑみのまゆひらけたるを、「をちかた人にも申」とくちすさひたまへは、みすいしん、「かれなん、ゆふかほと申」とまうせは、「をりて、もてまいれ」とおほせらるゝを、よりておるに、こかしたるあふきのをかしきをさしいてゝ、「これにすゑて、まいらせ給へ」とてあるを、もてまいりたり。あはせさせ給さに、しそくさゝせて御覧すれば、

心あてにそれかとそみるしらつゆのひかりそへたるゆふかほの花

かきさま、ゆへなきにしもあらねは、たれかしたることにかと、こゝろにくゝおほさる。

をりてこそゝれかともみめたそかれにほのくゝみゆるはなのゆふかほ

源氏中将、六条わたりのしのひところにおはしたれば、わりなき日ころのたへまを、いみしく思しめりたるを、見すてゝかへり給も、いとおしなから、たちこみたるあさきりをわけ給へは、いろくゝの花のほひも見わかれず、御なをしもいたくしめりたり。はなちいてまで、御をくりにまいれる中将の君をひきとゝめて、かうらんのすみに

て源氏、

さく花にうつるてうなはつゝめともをらてすきうきけさのあさかほ

「いかゝすへき」とて、ゝをとらへ給へれば、いとなれてとく、

秋あききりのはれまをまたぬけしきにてはなに心をとめぬとそみる

ユラカホ(三位中將ノムスメナリタマカツラン内侍ノカミ)ありしゆふかほ、たつねとり給て、かよひ給あかつき、ねさめにちいさきところなれば、みたけさうしむするところなめりときこゆるに、たうらいたうしとをかむなる。「かれ、きゝたまへ。このよとのみは思はぬなるへし」とて、源氏、

うはそくかをこなふ道をしるへにてこんよもふかきちきりたかふな
返、女、

さきの世のちきりしらるゝ身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよ

この女を、しはし、かくあやしからぬ所ならて、かたらひたまはまほしうて、一条院にほのかなるあか月いておはす。道もいと露けし。「かやうなる事も、またならはさりつるを、こゝろつくしなるうる事なりや」とて源氏、

いにしへもかくやは人のまとひけんわかまたしらぬしのゝめのみち

「ならひ給へりや」との給へは、はちらひて、

山のはの心もしらてゆく月はうはのそらにてかけやたえなん

をはしましつきて、かたらひ給ければ、この女に、たれといふことを、しらせ給はさりければ、うらめしけにおもひたり。源氏、

ゆふ露にひもとく花はたまほこのたよりにみえしえにこそありけれ

「つゆのひかりや、いかに」との給へは、女、

ひかりありとみしゆふかほのうは露はたそかれときのそらめなりけり

二条院ナニカシノは、ものおそろしきところにてそありける。女をそろしと思て、にはかにきへいりぬ。源氏おほしなげく事かきりなし。女房をかたみとおほして、かたらひ給。かせはやうふきて、くもりたるひ、いたうなかめたまひて、

みしひとのけふりをくもとなかむれはゆふへのそらのなもむつかましきかな

この女のごとに、いたうおほしなげきて、わつらひ給を、うつせみの人きゝて、いよへくたりなんとするも、はるかなるほとはさすかにこゝろほそく、おほしわすれぬるなめりと、こゝろみに、「うけたまはりなげくことも、こゝろにいてゝえきこえず」とて、

とはぬをもなとかとゝはてほとふるにいかはかりかはおもひわつらふ

「ますたは、うときこそ」と、きこへたり。めつらしきに、あはれはすてかたうて、

うつせみのよはうきものとしりにしをまたことの葉にかゝるいのちよ

いつもちのかたゝかへにて、みそめ給へりし人は、蔵人の少将をなんかよはず、となんきゝたまひて、いかにあさしと、少将のこゝろのうちもいとをしう、またかの人のけしきもゆかしければ、こきみきして、

ほのかにものきはのをきをむすはすは露のかことをなにゝかけまし

返、

ほのめかす風につけてもしたをきのなかはゝしもにむすほゝれつゝ

ゆふかほの女の四十九日、しのひてせさせ給。さうそくのはかまをとりよせて源氏、

なくゝもけふはわかゆふしたひもをいつれのよにかとけてみるへき

いよのすけ十月一日くたるに、女くたるらんとて、あふきくしなとつかはすに、かのもぬけのこうちきをかへしつかはす。源氏、

あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすら袖のくちにけるかな

返、女、

せみのはもたちかへてける夏衣かへすをみてもねはなかれけり

おもへとも人に、ぬ心つよさにて、ふりはなれぬるひとかな。けふそまた、たちわかるゝひなりけるもしく、うちしくれて、そらのけしきもいとあはれなり。うちなかめたまひて、

すきにしもけふわかるゝもふたみちにゆくかたしらぬあきのくれかな

三 わかむらさき

源氏中将わらはやみに、いたうわつらひ給て、きた山なるところにて、ましなひ給ほとに、をこらせたまはぬほと、とかくたすみ給に、こしはかきのあなたをのそき給へは、いみしくゆへくしくすみなして、けふそくによりかゝりてゐたり。

とをはかりなるちこの、よにゝすおかしけなる、よりきて、めをすりてうつふしたり。「なにことぞ」といへは、「いぬきか、すゝめのこをにかしたるや」といらふれば、「あな、をさなのさまや。けふあすともしらぬ身のありさまを、おほしいれす、かゝることよ」とうちなきて、あまきみ、

をいたゝんありかもしらぬわかくさををくらん露すそきえんかたそらなき

まへにゐたるをと、けにとうちなきて、

はつくさのをいゆくすゑもしらぬまにかてかつゆのきえんとすらん

このちこのうはとおほしき人に、こひとらむとおほしくて、せうとのそうつして、あないゝはせたまひて、たちよりにたまへり。「うちつけにおほえて」といへは、「けにおほさるらんも、ことはりなり」とて源氏、

「はつくさのわかはのうへをみつるよりたひねのそてもつゆそかはかぬ

とは、まごへ給ひてんや」との給へは、「さらにかやうの御けしき、まごへ給ふへき人も、のし給はぬに」とまごゆれは、「だ、さるやうあり」との給ふ。あまきみまゝて、「いまめかしき御ことかな」とのたまひて、ひさしうなれはなさけなしとて、

まくらゆふこよひはかりのつゆけきをみやこのちこにくらへさらなん

そうつおはしぬれは、「よし、かくまごゑつれは、たのもしう」とて、をしたてたまひつ。あか月になれば、法華三昧をこなふたうのせほうのこゑ、山をろしにつきてまごゆ。いとたうとくて、

ふきまよふみやまをろしにゆめさめてなみたもよをすたきのおとかな

そうつ、

さしくみにそてぬらしける山みつのすめる心はさはきやはする

かへりたまふとて、「いま、この花のをりすこさすに、いりこむ」とて、そうつの御かわらけなと、まいり給ついでに、

みや人にゆきてかたらん山さくらかせよりさきにきてもみるへく

と、のたまふもてなし心つかひまて、めもあやなるに、そうつ、

うとんくゑのはなまちえたるこちしてみやまさくらにめぐらね

と、まうし給へは、「ときありてひらくるは、あはたしかなるものを」とて、ほゝゑみ給ふ。ひしり、かはらけ給て、

をく山のむろのほそをまれにあけてまたみぬ花のいろをみるかな

いてたまふとて、そうつのもとなるをかしけなるわらはして源氏、

ゆふまくれほのかに花のいろをみてけさはかすみのたちそわつらふ

御返、あまうへ、

まことにや花のあたりはたちうまとかすむるそらのけしきをもみん

又のひ、御ふみつかはすなかに、ちいさくて、

をまかけはみをもはなれすやまさくらこゝろのかきりとめてこしかと

よのまのかせをうしろめたく、とあり。「また、なにはつをたに、はかくしうつゝけ侍らねは、かひなくなん」とて、返あまきみ、

あらしふくをのへのさくらちらぬまをこゝろとめけるほとのはかなさ

ときこへたり。又二三日ありて、つかはす御ふみのなかに、れいのちいさくて、

あさか山あさくも人をおもはぬになとやまのるのかけはなるらん

御返事、あまきみ、

くみそめてくやしときし山のるのあさきなからやかけをみすへき

ふちつほの女御わつらひ給事ありて、このほと、さとにもし給へり。わう命婦をかたらひて、いかゝものし給けん。さらにうつゝとおほえたまはす、なにことをかはきこへやりたまはん。くらふ山にやとりもほしけれと、あやになるみしかよにて、なか／＼なり。あか月いて給とて源氏、

みてもまたあふよまれなるゆめのうちにやかてまきるゝわかみともかな

とおほしたまふも、さすかにいみしければ、

よかたりに人やつたへんたくひなくうきみをさめぬ夢になしても

ありしやまてらのあまきみ、わつらひて京にいてたるに、をはしたり。このちこ、「なとや、みたまわぬ」と、いわけなくいふこゑ、いとをさなし。かへりてつかはす。

いはけなきたつのひとこゑきゝしよりあしまになつむふねそえならぬ
あきのゆふへに、わかむらさきをおほしいて、源氏、

てにつみていつしかもみむゝらさきのねにかよひけるのへのわかくさ
このわつらふうは、うせにけり。わかくさ御もとにおはしたり。このちこの御めのとぞ、あひきこへたる。「なを
人つてならて、きこへはや」とて源氏、

あしの^{わか}ねのうらにみるめはかたくともこはたちなからかへるなみかは

「けにこそ、かしこけれ」とて、この人、

よるなみのこゝろもしらてわかのうらにたまもなひかんほとそききたる

かへらせ給ふみちに、かよひ給ところのあるを、たゝかせたまふに、きゝつくる人もなし。すいしむのをかしきこ
ゑして、うたはせたまふ。

あさほらけきりたつそらのまよひにもみてすきかたきいもかゝとかな

と、うたわすれは、よしあるしもつかへして、

たちとまりきりのまかきのすきうくはくさのとさしにさはりしもせし

ありしむらさきのきみ、むかへとり給て、はかなきこなどのやうにやしなひて、ならひなとして、もてあそはせ給。
源氏てならひに、いとちいさくて、

ねはみねとあはれとぞ思ふむさしのゝつゆわけわふる草のゆかりを

「きみも、かまたまへかし」とあれは、「かきそこなひつ」と、かくしたまふを、わりなくとりて見たまへは、
かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなるくさのゆかりなるらん

ならひ すゑつむはな

うちに、さゑもむの命婦といふ人、源氏にきこゑさす。ひたちの宮ときこゑさせしか、御むすめ、こゝろにくきふる宮はらにておはするを申。「こゝろみさせたまへ。つたへ侍らん」とてあり。かしこにあるにおはして、「まつ、のそかせよ」との給へは、「のそかせたてまつらん」とて、いり給ひたるに、もとよりひとありけり。たれならんとおほして、あゆみかへり給ふに、もとよりきたり。たゞいまて、うちにありつる頭中将なりけり。「すてさせたまひつるか、こゝろうければ、御をくりつかうまつらんとて、まいりつる」とて、

もろともにおほうち山をいてつれといるかたみせぬいさよひのつき

「おもひよらぬことよ」とて、源し、

さとわかぬかけをはみれとゆく月のいるさの山をたれかたつねん

いひよりたまへとも、ちかくて御いらへもなし。「あな、おほつかな」とて源氏、

いくそたひ君かしゝまにまけぬらんものないひそといはぬたのみに

「のたまひも、すてよかし。いふたすきは、くるし」とのたまへは、女君のめのとに、しゝうとてあるわか人、

かねつきとちめむ事はさすかにてこたえまうきそかつはあやしき

ひとつてにはあらぬさまなれは、おもふよりはあまりたりとおほして、

いはぬをもいふにまさるとしりなからをしこめたるはくるしかりけり

源氏なこりをしみたまひて、「なを、ありかたきよかな」と、うめかれたまひて、つとめての御ふみ、ゆふつけて、

ゆふきりのはれぬけしきもまたみぬにいふせさそふるよひのあめかな

「雲まゝちみむほど、いかにく」と、こゝろくるしう」とあり。返、

はれぬよの月まつさとをおもひやれをなしこゝろになかめせすとも

むらさきのかみ、としへにけるいろあひしてぞ。

ひたちの宮より、ゆきいたうふりたるつとめて、いてたまふとて、はしにいさなひつゝみたまへは、みくるしきことゝも、いと見ゆるなかに、はなそ、ふけむのゝりたまへるものゝこゝちする。かたはらいたくはおほへなから、なにくれとかたらひたまへとも、いらへなし。

あさひさすのきのたるひはとけなからなとかつらゝのむすほをるらん

御かへし、くちをもけなれば、いてたまひぬ。かとおくるものゝ、いとさむけにて、かしらはゆきのやうなるをみたまひて、

ふりにけるかしらのゆきをみる人もをとらすぬるゝあさのそてかな

「わかきものは、かたちかくれす」とうちすしたまふ。さてこの女ま、あはせたてまつりたりし命婦、「あやしく、かたはらいたきことさふらふ」とて、ほゝゑみてきこゆれば、「れいの、ゑんたちたらん」とのたまふ。みちのくにかみの、いたふきにあつこゑたる、にほひはかりふかくしみたり。うたても、よくかきあはせたまひたり。

からころもきみかこゝろのつらければたもとはふかくそ。そほちつゝのみ

中将こゝろえす、うちかたふき給ぬれば、命ふ、「はこのふたに、つひたちの御よそひとて、さふらふめれば、いかてか、ひまかくされしさふらはん」とて、さしいてためれば、「ひまかくされなましかは、からくまし」とて、「まよそはさむひとまなき身に」との給。「をかしきかたには、これもいひつへし」とほゝゑみ給て、命婦そはめにみれば中将、

なつかしきいろともなしになにゝこのすゑつむはなをそてにふれけん

「いろこきはなと、みしかとも」など、かきけかし給。この花のとかめをそ、あるやうあらんと思あはするに、いとをかしくなりぬ。命婦きこえさす。

くれなるのひとはなころもうすくともひたすらくたすなをしたてすは

人くまいは、「とりかくさんや。かゝるわさは、ひとするものにやはあらん」とうめき給へは、あいなう、われさへはつかしくなりぬ。御返、

あはぬよをへたつるなかの衣てにかさねていとみもしみよとや

むらさきのうへの御もとに、正月むめのはなのさきたるを、みいたし給て源し、

くれなるのはなそあやなくうつもるゝむめのたちゑはなつかしけれと

四 もみちの賀

朱雀院行幸おもしろきたひなれば、しかくは御前にて、源氏君せいはいは、かたちてに、こしうとの中将、をなしきまいのあひまい、をもち、よにみえぬに、詠なとし給へるさへ、これや、ほとけの御かれうひんのことゑならんときこゆ。詠はてゝ、中将てうちなをし給つる。なみた、なかさぬ人なし。頭中将の、かたはらなる、はなのそはのみやまきなり。源し中将まいはて給て、ふちつほ、「いかゝ御覧しつらん。よにしらぬ心ちしなからこそ」とて、

ものおもひふにたちまふへくもあらぬ身のそてうちふりし心しりきや

「あなかしこ」とあり。御返めもあやなり。御かたちありさまたまひ、しのはすやありけん。

から人のそてふることはとをけれとたちゐにつけてあはれとはみき

「おほかたにて」とあり。この女御のうみ給へるみこは、この源しの御こにそありける。命婦もさ思、源氏もさおほしけれと、かたみにえいひいてたまはす、「たゝ人つてならて、いかてきこえん」とて、なき給ふさま、ことこゝろふかく、あはれにをろかならず、このなからひのほと、おもひやるへし。

いかさまにむかしむすへるちきりにてこの世にかゝるなかのへたてそ

命婦みやのをはしたるさまをみれば、はしたなくも、えきこへて、かくそきこゆる。

みてもおもふみぬはたいかになけくらんこやよのひとのまとふてふやみ

藤つほの女御の御はらのわか宮を、うへ、いたきたまひて源氏の中將にみせたまへは、をそろしくも、かたしけなくも、うれしくも、あはれにも、かた／＼うつろふこ／＼ちして、たちたまひぬ。とこなつのはなにつけて命婦のかり、つかはず。

よそへつゝみるにこゝろはなくさまてつゆけさまさるなてしこのはな

命婦をりよくて御覽せさすれば女御、

そてぬるゝつゆのゆかりとおもふにもなをうとまれぬやまとなてしこ

うちにさふらふないしのすけ、としなともをとなひたれと、いろめきたる人を、いかにしてか見そめたまひけん。

うちの御けつりくしはてゝ、ひとめもなきほとに、たわふれことをして、すけのもちたるあふきをとりに見たまへは、かたつかたには、こたかきもりのかたをぬりかへし、かたつかたには、としはいとをいたれと、よしなからず、「もりのしたくさをひぬれば」とかきすさひたるを、なにくれとのたまふほとも、にくけなく、人や見つらんとくるしきを、女はさもおもひたらず、すけ、

きみしらはたなれのこまにかりかはんさかりすきたるしたはなりとも

といふさま、こよなくいろめきたり。源氏、

さゝわけてひとやとかめんいつとなくこまなつくめるもりのしたくさ

かくてこの源氏のきみ、温明殿わたりをうそふきありきたまふに、この内侍ひわをいみしくひきていたり。あつまやをしのひやかにうたひて、よりたまへれば、「をしひらき／＼ませ」とうちそふ。

たちぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝるあまそゝきかな

と、なけきいたる。なにことを、いとおもふらんと、うとまし。源氏の御返、

ひとつまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりはなれしと思ふ

このないしのすけに、いたくうらみられて、源氏をはしたり。中将をとさむと思て、いかなることともかありけん。

源氏てをいたくつみ給へれば、わらひぬ。かたみに、をひときたまふに、ほころひのほろくとたゆれば中将、

つゝむめるなやもりいてんひきかはしかくほころふるよはのたもとに

源氏の中將、

かくれなきものとしるくなつころもきたるをうすきころとそ見る

ないし、よるのものさわかしさに、をちたるをひなと源氏の君にたてまつるとて、

うらみてもいふかひそなきたちかさねひきてかへりしなみのなこりに

「そこをあらはに」と、きこへたり。返、

あらたちしなみのころはさわかねとよせけむいそをいかうらみぬ

源氏、このをひは中将のなりければ、をなしいろのかみにつゝみて、中将のかりつかはずとて、

なかたえはかことやをふとあやうさにはなたのをひはとりてたにみす

中将たちかへり、きこえたり。

きみにかくひきとられけるをひなれはかくてたえぬるなかとかこたん

「ゑのかれさせ給はし」と、きこえたり。

ふちつほの女御、きさきにゐたまひぬ。うちへいりたまふひ、源氏御とも、つかふまつりたまへり。御こしのうち

のみ思やられて、ひとりこたれたまふ。いまはさいこにて、

つきもせすころのやみにくるゝかなくもるに人をみるにつけても

五 はなのえむ

はなのえんに、源し宰相中将まいりたまいきり。うちふるまいたまへるさま、いひしらすめてたければ、さすかにめとまりて、おほしいつることおほくて、ふちつほの中宮、

おほかたにはなのすかたを見ましかはつゆもころのをかれましやはかくおほしけんも、いかゝはもりいてけん。

源宰相のきみ、こきてんのわたりをたゝすみたまふに、女御はうへにものしたまへは、ひともなし。をくのかたより、たゝ人ともおほえぬか、「おほろ月夜に、しくものそなき」と、うちすさひてあゆみくるを、ふとひかへたまふ。源氏、

ふかきよのあはれをしるもいるつきのおほろけならぬちきりとそおもふ

ゑいこゝちや、いかゝありけん。のこりなく、みたれたまひぬ。「なのりしたまへ」とあれは女、

うきみよにやかてきえなはたつねてもくさのはらをはとわしとやおもふ

「ことはりしりたまへりや」とて御返、

いつれそとつゆのやとりをわけんまにこさゝかはらにをかせもこそふけ

かたみにとて、あふきをとりていて給ぬ。日ひとひ、なかめくらしたまひて宰相、

よにしらぬこゝちこそすれありあけの月のゆくゑをそらにまかへて

「くさのはらをは」といひしか、こゝろにかゝりたまへるは、をろかならぬにや。右大臣殿アシ大臣ナリ、ゆみのけちのつゐてに、ふちのえんし給けるに、この宰相きみをはせぬはくちをしうて、御この少将してたてまつり給。

わかやとのはなしなへてのいろならはなにかはさらにきみをまたまし

源氏の宰相中将、をはしたり。さけにいたうゑいて、とかくまきはしてたち給ぬ。女房あまた、いこほれたるところによりて、まことや、おほろ月よとおほしいつるも、あはれなるに、ちかく人のけはひすれば、源氏、「あふきをとられて」とうたひたまひて、

あつさゆみいるさのやまにまとふかなほのみしつきのかけやいみゆるといとてをしあてにの給を、ゑしのはぬなるへし。

ころろいるかたならませはゆみはりの月なきそらにまとはましやは

六 あふひ

さいるん、はしめてことし本院の御けいあるとしなれば、源氏まいりたまふ。みやすところ見給に、いて給に、つらうもうくも、かたくなみたこほれ給。

かけをのみみたらしかはのつれなきにみのうきほとそいとくしらるゝ

源氏まつりの日、むらさきのうへのかみ、そき給とて、

はかりなきちいろのそのみるふさをひゆくすへはわれのみそ見む
ときこへたまへは、むらさきのうへ、

ちいろともいかてかしらむさためなくみちひるしほのゝとけからぬに

このきみと、ひとつくるまにて、かものまつりみたまふに、むまはのをとくゝに、ところなくてたてわつらふを、よしある女くるま、「こゝにて御らんせよ。ところも、さりきこへむ」と、あふきのはしに、かくかきてたてまつる。

はかなしやひとのかさせるあふひゆへかみのゆるしのけふをまちける

「しめのうちには」とあるをおほしいつれば、源ないしのすけなりけり。「あさましようも、わかやくものかな」と、

にくさに御返、

かさしけるころそあたにおほゆるやそうち人のなへてあふひを
めつらしとおもひきこへけり。又をしかへし、

くやしくもかさしけるかなのみにして人たのめなるくさはかりを

かの六条のみやすところの、わつらふことを、いとをしときたまひなから、をとのひめきみのわつらひ給に、
「ひころすこし、をこたり給やうなりつる人の、にはかにをこりたまへれば、くるしかり侍に、あかきよき侍らて
なかくに」などあり。御返みやす所、

そてぬるゝこひちとかつはしりなからをりたつたこのみつからそうき

御返、

あさみにや人はをりたつわかたはみもそをつまてふかきこひちを

きたのかた、いたくわつらひ給に、この宮すところ、いきすたまにいて給たり。かのくるまたてあらそひしを、う
しとおもひしか、人をあしかれとなけれ、とかくあくかれきけるなりとて、ひとにつき給て宮すところ、

なけきわひそらにみたるゝわかたまをむすひとめよしたかへのつま

ときこえさするを、うしとおほすに、かついたうわつらひてうせたまひぬ。はかなく、けふりになりたまひぬる事
いとかなし。八月なれば、あけくれのそらのけしき、あはれなるに、おとゝのいたうやみにまよひたまへるも、こ
とわりに、そのみなかめられたまひて、源氏の大将、

のほりぬるけふりはそれとわかねともなへてくもゐのあはれなるかな

なをさりのすさひにより、つらふはつかしと、おもひはてられたてまつりけんことのくやしう、にふめる御そたて
まつるも、われさきたましかは、ふかくそめまし、とおもひたまふも、をろかならず。

かきりありてうすゝみころもあさけれとなみたそゝてをふかくなしける

など、あはれによをおほしめされて、をこなひすましたまひて、「ほうかい三まい、ふけんたいし」とのたまへる、いふかきりなくめてたし。ふかきあきのよのけしきにも、みにしみて、あかしかねたまへるあさほらけ、きりわたれるに、きあを(こまか)にひのふみを、きくにつけて、さしおきていにけり。「いまめかしくも」とてみたまへは、宮すところのなりけり。

ひとのよをあはれときくもつゆけきにをくるゝそてをおもひこそやれ

「つねよりも、いふなる御てかな」と、見給。「つれなの御とふらひや」と、うとましなから大将、

とまりしもる身イきゑしもをなしつゆのよにこゝろをくらんほとそはかなき

こゝろのをにゝほのめかし給も、うしとおほす。こしうとの中将いときよけにて、いろにやつれてまいりたまへるに、大将との、かうらんにをしかゝりて、なかめいりたまへり。かせあらゝかにふきて、しくれさとしたるほと、なみたもあらそふこゝちして、「あめとやなり、くもとやなりにけん。いまはしらす」と、ひとりこち給て、つらつゑつき給へるさま、女にては見すてゝなくならんたましひ、とまりぬへし。中将いろなるこゝろは、ちかくつゐ給。とうの中将、

あめとなりしくるゝそらのうきくもをいつれのかたとわきてなかめん

「ゆくゑなくや」と、ひとりことのやうなるを、

みしひとのあめとなりしくもゑさへいとゝしくれのかきくらすかな

大将殿しもかれのせむさいのなかに、りむたう、なてしこなとのあるを、ゝらせたまひて、わかきみの御めのとし、うはきたの方にみせたてまつり給。

しも草イかれのまかきにのこるなてしこをわかれしあきのかたみとそみる

うはきたのかた、かなしき事かきりなくて御返、

いまでも見てなか／＼袖をくたすかなかまほあれにしまとなてしこ

大將殿、あさかをの宮とは前齋院を、こゝろにかけてこゑさせ給なり。(まごゑか)そらのいろしたるからのかみに、こゝろとめてかきたまへるさま、いと見るかいあり。さりとも、けふのあはれはみしり給らんとなん。

わきてこのくれこそゝてはつゆけゝれ物おもふあきはあまたへぬれと

「いつもしくれの」とあり。「すくしかたきをり」と、ひとくそゝのかしきこゆれば、「おほうち山をおもひやりきこへなから、えやは」とて、

あきゝりにたちをくれぬときゝしよりしくゝそらもいかゝとそおもふ

うへの御いみなとはてゝ、大將はしめて院にまいりたまふ。かきりなく、おとゝなともあはれつきせず、たへかたけにおほしたり。大將いてたまひけるまゝに、をはしけるかたを、をとゝ見たまへは、またさなからあり。御てならひのほんくとも、ちりたるをみれば、あはれなるふることもかきすさひ、からのもやまどのも、しむもさうも、かきすさひたまへるに、「ふるきふすま、ふるきまぐら」とあるところに、をとゝ、

なきたまそいとゝかなしきねしとこのあくかれかたきこゝろならひに

又「ことはしけし」とあるところに、

きみなくてちりつもりぬるとこなつのつゆうちはらひいくよねぬらん

大將、むらさきのひめきみの御もとにおはしたれば、ひころのほとに、こよなくをとなひたまひにけり。人のけちめ見わくましき御ありさまなれば、おとこはとくをき給。女はえをき給はぬあした、ありけり。大將をき給て、御すゝりを丁うちへさしいれて、いて給ぬるに、ちるさくて、ひきむすひたるものありけり。女きみ、なにこゝろなくひきあけて見たまへは、

あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかになれしよるのころもを

と、かきすさひ給へり。女きみ、いとこゝろうく、たのもしひとにおもひけん、あさましうおほす。大将殿としかへりて、ついたちの日、をとゝにまいり給に、おとゝえしのひあへたまはず、御さうそくまうけて、たてまつりかへさせ給を、「こさらましかは、くちおしとおほされまし」と、こゝろくるしうて、大将、

あまたとしけふあふためしいろころもきてはなみたのふるこゝちする

「ゑこそ、おもひたまへつめね」ときこえ給。御返、

あたらしきとしもいはすふるものはわひぬるひとのなみたなりけり

七 さかき

みやすところ、むすめの御ともに、いせへくたりたまひければ、大将との、野の宮にて、たちよりたまへるを、さしいれて、「かはらぬいろを、しるへには」とて、「さも、こゝろうく」とあれば、

かみかきはしるしのすきもなきものをいかにまかへておれるさかきそ

と、きこへ給へは、大将、

をとめこかあ。りかとおもへはさかきはのかをなつかしみとめてこそをれ

きこゑたまふ事とも、つくすへうもなし。あけゆくそらのけしき、さらにつくりいてたらんこゝちするほとなり。

大将、

あか月のわかれはいつもつゆけきをこはよにしらぬあきのそらかな

まつむしのいとゝしきね、わかれしりかほなるも、わりなき御こゝろまとひは、ことゆかぬにや。宮すところ、

おほかたのあきのわかれもかなしきにねなゝきそへそのへのまつむし

かもかはらにて御はらへたまふとて、いて給に、大将とのより御ふみあり。れいのつきせぬ事ともおほく、又、「かけまくも、かしこきを」とて、さいくうにきこゑ給。

やしまつるくにつみ神も心あらはあかぬわかれのなかをことはれ
御返、女別当、

くにつかみそらにことはるかならはなをさりことをまつやたゝさん
いせへくたりたまはんとて、うちへまいりたまふ。みやすところも、こしのしりにのり給につけても、ちゝをとゝの、かきりなきほとにと、かしつきたまひしに、かくさまかはりて、すゑのよに、こゝのへのうち見給にも、ものゝあはれにおほされて、みやすところ、

そのかみをけふはかけしとおもへともこゝろのうちにもそのかなしき
うちよりいて給に、二条よりとうるむをいて給ほと、院のかたはらなれば、大将あはれにおほされて、

ふりすてゝけふはゆくともすゝかゝはやせせのなみにそてはぬれしや
と、きこへたまへと、くらきほとにて、又あしたにそ、みやすところ御返きこゑたまふ。

すゝかゝはやせせのなみにぬれくすいせまてたれかおもひをこせん

大将との、「あはれ、すこしそへたらましかは」とおほす。きりいたうふりて、あはれなるあさほらけに、なかめ
給てひとりこち給。

ゆくかたをおもひもやらんこのあきはあふさかやまをきりなへたてそ

大将殿のちゝ院、はかなくうせ給て、大将こもりおはするところに、先帝御息後二六式部卿兵部卿の宮まいりたまひて、あはれなるむか
しものかたりきこえたまふ。をまへのごゑうの、ゆきにしほれて、したはゝみなかくれたるを御らんして、

かけひろみたのみしまつやかれにけんしたはちりゆくとしのくれかな

と、きこえ給へは、大将の御そ、(い)くたひそぬれたまひぬ。 いけのこほりの、ひまなくみゆるを大将、

さへわたるいけのかゝみのさやけきに見なれしかけを見ぬそかなしき
うちの王命婦も、こゝろの御ことをいたくなけきて、

としくれていわねのみつもこほりとち見しひとかけのあせもゆくかな

わりなきひまに大将、内侍のかみのもとへをはしたるに、あかつき、とのる申する人の、とらひとつ申を、きゝて
女、

こゝろからかた／＼そてをぬらすかなあくとしうるこゑにつけても
かへし大将、

なけきつゝわかよはかくてすくせとやむねもあくへきときそともなく

大将殿、ふちつほのもとにわりなくして、いりたまへり。院のをはしましゝをり、かたしけなく、ゆめしらせたま
わすなりにしを、いまはなき御かけもをそろしく、一入東宮(冷泉院)の御ためも、あはれはせちに、もてはなれたまふ。わ
りなくたはかりて、いふにをはするに、宮もゑをさめたまわす、「このよならぬみとも、なりぬへきを」など、き
こゑたまふも、むくつけし。大将、

あふことのかたきをけふにかきらすはいまいくよをかうらみつゝへん

「御ほたしにもこそ」と、きこゑたまへは、うちなきて、みや、

なかきよのうらみを人にのこしてもかつはこゝろのをあるとしらなん

大将、雲林院なるところに、をちの律師のもとに日ころをはして、むらさきのきみのもとに、ふみたてまつりたま
へり。「ゆきはなれぬへくや、とおもひたまひしみちなれと、つれ／＼もなくさめかたくて、なを見さしたるふみ
とものはへる、みはて／＼」など、かゝれたり。あはれにみところおほくて、

あさちふのつゆのやとりにきみをきてよものあらしそしつこころなき
女きみ、うちなきて、御返には、

かせふけはまつそみたるゝいろかはるあさちかつゆにまよふさゝかに

大将、雲林院ちかきほとなれは、さいるむにもきこゑさせ給。中将のきみには、「かくて、たひのそらになん、も
のおもひにあくかれにけるを、ほしゝるかたにもあらしかし」など、うらみて、御前には、

かけまくもかしこけれともそのかみのあきおもほゆるゆふたすきかな

さいるんの御返は、ゆふのかたはしに、ゆめはかりにて、

そのかみやいかゝはありしゆふたすきこゝろにかけてしのふらんゆへ

大将、東宮みたてまつりにまいり給へりけるに、源氏まいりたまひて、御ものかたりなときこえたまふに、むかし
をおほしいてゝ、をなしこゝのへのうちなれは、みやうふして、きこえたまふ。

こゝのへにきりやたてつるくものうへの月をはるかにおもひやるかな

かへし、

月かけは見しよのあきにかはらねとへたつるきりのつらくもあるかな

はつしくれ、いつしかけしきたちたるひ、いかゝおほされけん。ないしのかみの御もとより、

こからしのふくにつけつゝまちしまにおほつかなさのほともへにけり

かへし、

あひみすてしのふるころのなみたをはなへてのあきのしくれとや見る

しもつきのついたちころは、院の御はてなるに、雪いたうふりたるに、大宮にたてまつり給。

わかれにしけふはくれとも見し人のゆきあふほとをいつとたのまん

御返、

なからふるほとはうけれとゆきかへりけふはその日よにあふこゝちして
大宮の御くしをろさせ給に、源氏の大將まいり給て、あさましきことなときこえ給ついでに、

月のすむくもるをかけてしのふともこのよのやみになをやまとはん

御返、

おほかたのうきにつけてはいとへともいつかこのよをそむきはつへき

「かつきこえつゝ」と、きこへいたしたまへり。又のちに、このみやにまいりたまひて、

なかめかやるあまのすみかとみるからにまつしほたるゝまつかうらしま

はしちかきほとにて、みつからきこえ給。

ありしよのなこりたになきうらきしまにたちよるなみのめつらしきかな

頭中將、ゐんふたきのまけわさ、したまひけるに、かはらけたまはりて、

それもかとけさひらけたるはつはなにをとらぬきみかにほひとそそみる

源氏のきみ、

ときならてけさゝく花はなつのあめにしほれにけらしにほふほとなく

八 はなちるさと

さみたれのそら、すこしはれたるくもまに、しのひたるところへをはしけるみちに、さわやかなるいゑのこたち、
よしめきたるに、わこむひきならずあり。をかしときゝ給は、たゝひとよ見たまひしやとりなりけり。をりしも、
ほとゝきすなきてわたれば、これみつをいれたまひて、

をちかへりゑそしのはれぬほとゝきすほのかたらひしやとのかきねは^たかへし、

ほとゝきすことゝふこゑはそれなれとあなおほつかなさみたれのそら
ことさらに、たとるとみえたり。ほいのところにおはして、御ものかたりきこゑさせ給けるに、ほとゝきすのなき
ければ、

たちはなのかをなつかしみほとゝきすはなちるさとをたつねてそとふ
女御の御返、

ひとめなくあれたるやとはたちはなはなこそそのきのつまとなりけれ

九 すま

源氏、すまのうらへをはせむとてのころ、をとゝにわたりたまひて、御ものかたりなときこゑ給ついでに、

とりへやまもえしけふりもまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく

御返みやのとむ、^本

なき人のわかれやいとゝへたゝらんけふりとなりしくもるならては

すまへをはする御とふらひに、^{源氏のツト、ナリ}帥宮、三位中将なとまいりたまへりけるに、たいめんし給はんとて、御かゝみゝ給
て、女きみにきこえ給。

女きみ、^{みはか}
^{はかなく}はかなくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけはゝなれし

わかれてもかけたにとまるものならばかゝみをみてもなくさめてまし

かのはなちるさとおはして、よふかくいて給に、ありあけのつきのいりはつるに、よそへられて、あはれなるに、女きみのこき御そにうつりたるも、けにぬるゝかほなり。

月かけのやとれるそてはせはくともこめてもみはやあかぬひかりなこりをいみしくおほしたる、こゝろくるしければ、かつはなくさめたまふ。

ゆきめぐりついにすむへき月かけのしはしくもらむそらなゝかめそないしのかみの御もとに、わりなくてきこえたまふ。

あふせなきなみたのかはにしつみしやなかるゝみをのはしめなりけんかへし、

なみたかはうかふみなはもきえぬへしなかれてのちのせをもまたすてあすとてのくれには、院の御はか、をかみ給はむとて、きたやまへまうて給ふついでに、宮にまいり給て、「御事つてや」と、きこえ給へは、

みしはなくあるはかなしきよのはてをそむきしかいもなくゝそふる

源氏の御返、

わかれしにかなしきことはつきにしをまたそのよのうさはまされる

月まちいて給。御むまにて、みそきの日、かりの御すいしむ、つかうまつりし左近藏人にて、かうふりゆへきも、ゑす、つかさもとられて、はしたなけれど、御ともにまいる。かものみやしろ、みわたさるれば、をりて、御むまのくちをとるとて、藏人、コノ歌源シノトモ

ひきつれてあふひかさしゝそのかみをおもへはつらしかものみつかき

御むまよりをりて、まかり申給とて、

うきよをはいまそわかるゝとゝまらんなをはたゝすのかみにまかせて御はかにまいり給へれば、みちくさしけくなりて、わけいり給ほと、いとつゆけし。よろつの事申て、をかみ給に、ありし御をもかけ、さやかにみえ給も、すゝろさむきをりなり。

なきかけやいかゝ見るらんよそへつゝなかむるつきもくもかくれぬる

あけはつるに、かへり給ぬ。東宮に御せうそくきこへ給。「けふなん、みやこはなれ侍ぬる」とて、王命婦もとに、いつかまたはるのみやこのはなを見んときうしなへるやまかつにしてさくらのちりたるえたにつけて、たてまつり給へり。御返、

さきてとくちるはうけれとゆくはるにはなのみやこをたちかへりみよいて給とて、むらさきのうへにきこえたまふ。

いけるよのわかれをしらてちきりつゝいのちを人にかきりけるかな
女きみ、

をしからぬいのちにかへてめのまへのわかれをしはしとゝめてしかな
すまにおはして、こゝろほそくおほし給へは、

からくにゝなをのこしけん人よりもゆくゑしらぬいゑるをやせん
こしかたのやまはかすみて、はるかにみゆれば、三千里のほかのこゝちし給ふに、かひのしつく、たえかたくおほされて、

ふるさとをみねのあらしはへたつれとなかむるそらはをなくもるか
京へ人たてまつり給とて、入道の中宮には、

まつしまのあまのとまやもいかならんすまのうら人しほたるゝころ

ないしのかみのもとには、

こりすまのうらのみるめゆかしきをしほくむあまやいかゝおもはん
宮の御返、

しほたるゝことをやくにてまつしまにとしふるあまもなけきをそつむ
ないしのかみの御かへし、

うらにつむあまたにつゝむこひなれはくゆるけふりよゆくかたそなき
むらさきのうへの御返には、御そなとして、たてまつりたまへり。

うら人のしほくむ袖にくらへみよなみちへたつるよるのころもを
いせのみやすところの御もとより、すまに御ふみあり。

うきめかるいせをのあまを思ひやれもしほたるてふすまのうら人^{ヒト}
ことおほくて、また、

いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身なりけり
御かへし、

いせ人のなみのうへこくをふねにもうきめはからてのらましものを
また、

あまかつむなけきのなかにしほたれていつまですまのうらになかめん
はなちるさとの御もとより、

あれまさるのきのしのふをなかめつゝしけくもつゆのかゝるそてかな
きむをかきならし給て源氏、

こひわひてなくねにまかふうらなみはおもふかたより風やふくらん
 かりのつれてくるこゑを、きゝ給て、

はつかりはこひしき人のなっらいになれやたひのそらとふこゑのかなしき
 と、の給へは、よしきよ、

かきつらねむかしのことそおもほゆるかりはそのよのともならねとも

みむふのせう

こゝろからとこよをすてゝなくかりをくものよにいそともおもひけるかな

前右近将監

とこよいてゝたひのそらなるかりなれかねもいはつらにをくれぬほとそなくさむ

よふくるまで、月をなかめたまひて、源氏、

みるほとそしはしなくさむめぐりあはんつきのみやこはゝるかなれとも

みかとの御ありさまなど、こひしうおもひいてきこゑて、

うしとのみひとへにもはおもほえてひたりみきにもぬるゝそてかな

大貳のほりけるに、このうらくゝをすくるほと、きむのこゑ、かせにつきてはるかにきこゑければ、こせちか、と
 かくかまへて、きこえける。

ことのねにひきとめらるゝつなてなはたゆたふこゝろきみしるらめや
 かへし、

こゝろありてひきてのつななたゆたはゝうちすきましやすまのうらなみ
 しはといふもの、ふすふるけふりの、いとおほくたちければ、

やまかつのいほりにたけるしはくもことくひこなんこふるさと人
ありあけかたの月、すこくさしいりたるに、

いるかたいのくもちにわれもまとひなんつきのみるらんこともはつかし
あかつきのそらに、ちとりのあはれになくを、

ともちとりもろこゑになくあかつきはひとりねさめのともたのもし

三月はかり、「なむてんのさくら、さかりになりぬらんかし」と、ひとくせの花宴などもおほしいて、

いつとなくおほみや人はのこひしきにさくらかさしくけふもきにけり

おとコシウツノ中将ナリの三位中將も、せちにおほつかなければ、まいり給へりけり。かへり給なんとする、あさほらけのそらに、
かり、つれてわたる。源しのみみ、

ふるさとをいつれのはるかゆきてみむうらやましきはかへるかりかね

中将

あかなくにかりのとよをたちはなれはなのみやこにみちやまとはん

かへりみのみして、いて給ふに、「いつかまた、たいめんたまはらん。さりとも、かくてやは」と申たまへは、あ
るしのみみ、

くもちかくとひかふたつもそらにみよわれははるひのくもりなきみそ

中将

たつきかなきくもるにひとりねをそなくつはさならへしともをこひつ、

三月ついたちに来てきたる、みのひのはらへしに、うみつらにいてたまへり。つねことくしくて、人かたのせて
なかすをみ給に、よそへられて、

しらすりきおほうみのはらになかれきてひとかたにやはものはかなしき
 きしかたゆくすゑ、おほしつゝけられて、

やをよろつ神もあはれとおほすらんをかせるつみのそれとなければ

十 あかし

にはかに、あめかせふきて、かみなりひらめきて、かへりたまふみちも、いとをそろしかりければ、このあめかせ
 やまで、ひころになりけるを、いかにおほしやりて、むらさきのうへ、

うら風やいかにふくらんおもひやるそてうちぬらしなみまなきころ

「かみのたすけ、いましはし、なからましかは、いかにわひしからまし」など、けすのいふをきくも、あはれなり。
 うみにますかみのたすけにかゝらすはしほのやほあひにさすらへなまし

むらさきのうへの御かへし、をそろしかりしほとに、あかしにわたりたまひにしかは、それよりそきこゑたまひけ
 る。ありし御かへし、

はるかにもおもひやるかなしらすりしうらよりをちにうらつたひして

あはちしまのむかひたるを、みやり給て、

あはとみしあはちのしまのあはれさへのこるくまなくすめるよのつき

あかしのうたうは、源氏の君のきむひきたまふをめてゝ、をのれもひわひきて、よろつものかたり、のこりな
 くきこへて、むすめのことなど、しのひてきこへいてたれば、「こゝろほそきひとりすみのつれくにも」と、の
 たまふを、かきりなくうれしとおもひたり。

ひとりねはきみもしりぬやつれくとおもひあかしのうらさひしさを

「されは、うらなれたまへるは」とて、源氏君、

たひころもうらかなしきにあかしさねくさのまくらはゆめもむすはす
またのひ、むすめのかり、御ふみつかはす。こまのくるみいろのかみに、
をちこちもしらぬくもるをななかめわひかすめしやとのこすゑをそとふ
御かへし、にうたうそきこへたる。

なかむらんをなくもるをななかむれはおもひもをなしおもひなるへし
また、つかはしける。

いふせくもころにものおもふかなやよいかにととふ人もなみ
このたひは、むすめ、

おもふらんころのうちよやよいかにまたみぬ人のきよやなやまん
十一日の月はなやかに、さしいてたるに、入道のもとより、「あたらよの」と申たり。をはするみちにても、むら
さきのことおほしいて、

あきのよのつきけのこまよわかこふるくもるをかけれときのまもみん
さてをはしたれは、むすめのけはひなど、やむことなきひとにもをとらす。きちやうのひもに、さうのことのさは
りて、ほのかになりたるも、しとけなく、うちとけなから、かきならしけるほととぎこえて、おかし。「きよなら
したることをさへや」と、そのかしたまへと、きよもいれねは、うらみたまひて、

むつことをかたりあはせん人もかなうきよのゆめもなかはさむやと
かへし、

あけぬよにやかてまとへるころにはいつれをゆめとわきてかたらん

「かゝることや、きこえん」とおほして、むらさきのうへの御もとに、きこえ給ける。

しほくとまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさひなれとも

御かへし、

うらなくもたのみけるかなちきりしをまつよりなみはこえしものそと

京へかへりなんとするころ、かのむすめのもとにおはして、あはれなることなと、かたりたまひて、

このたひはたちわかつとももしほやくけふりはおなしかたになひかん

かへし、

かきつめてあまのたくものおもひにもいまはかひなきうらみたにせし

源氏のもたまへるきむの御ことを、「又かきあはするまでの御かたみに」と、のたまへは、女、

なをさりにたのめをくめるひとことをつきせぬねにやかけてしのはん

いふともなく、ちすさひ、うらみたまひて、

あふまてのかたみにちきるなかのをのしらへはことにかはらさらなん

あかつき、よふかくいて給とて、

うちすてゝたつもかなしきうらなみのなこりいかにとおもひやるかな

御かへし、

としへつるとまやもあれてよるなみのかへるかたにやみをたくへまし

たひの御さうそくなとたてまつりて、けふたてまつるへき御さうそくに、

よるなみのたちかさねたるたひころもしほとけしとや人のいとはん

とあるを、さうかしけれと御覧しつけて、

かたみにそみるへかりけるあふことのひかすへたてんなかのころもを

入道、「よをはなれたるみなしこなれば、けふの御をくりを、あつかふまつらぬ」と、ひまなう、かひをつくる。

よをうみにこゝらしほしむ身にしもてなをこのきしをえこそはなれね

いみしくあはれとおほして、

みやこいてしはるのわかれにとらめやとしふるうらをわかれぬるあき

京にのほりたまひて、内にまいり給つれば、こまやかに御ものかたりともあり。よにいりぬ。十五夜月いとをもし
ろく、しつかなるに、「あそひなんとも、せんかし。きゝしものゝねなとも、きかて、ひさしうなりにけりや」な
と、のたまはするに、大将、

わたつみにしつみうらさひつるのこのあしたゝさりしとしはへにけり

うへ、いとあはれに、こゝろはつかしくおほしめして、

みやはしらめくりあひけるとときしあればわかれしはるのうらみのこすな

かへるなみにつけて、あかしへ御ふみつかはしける。

なけきつゝあかしのうらにあさきりのたつやとひとをおもひやるかな

かの帥のみやのむすめか五節かもとより、

すまのうらにこゝろをよせしふな人のやかてくたせるそてをみせはや

かへし、

かへりてはかことやせましよせたりしなこりにそてのひかたかりしを

あかしへつかはすめのものもとにをはしたるに、うちわたりにて、はやく見たまひし人なれば、たわふれことなどのたまひて、

かねてよりへたてぬなかならねとわかれはをしきものにそありける
 「したひやせまし」との給へは、うちわらひて、

うちつけにわかれをしむかことにてをもはぬかたにしたひやはせぬ
 あかしへつかはす御ふみに、

いつしかやそらうちかけんおとめこかよをへてなつるいわのをひさき
 御かへし、

ひとりしてなつるは袖のほとなきにおほふはかりのかけをしそおもふ
 あかしのうらの、おかしかりしことゝも、女のありさまなど、かたりたまふに、むらさきのうへ、

おもふとちなひくかたにはあらずともわれそけふりにさきたちなまし
 とのたまへは、「ごころうや。いかに」とて、

たれによりよをうみやまをゆきめぐりたへぬなみたにうきしつむ身そ
 五月五日ぞ、あかしにむまれたまへるひめきみの御いかなりける。「そのひ、まいりあへ」とて、人つかはす。

うみまつやときそともなきかけにいてなにのあやめもいかにわくらん
 御かへし、

かすならぬみしまかくれになくたつはけふもいかにとふ人そなき
 うちかへしく見たまひて、「あはれにも」と、たかやかにひとりこち給を、女きみしりめに見をこせて、「うらよ
 りおちにごくふねの」と、しのひやかにのたまへるさま、いとおかし。

花ちるさとおはして、「そらなくかめそ」と、たのめきこへしをはりのことゝもの給いてゝ、「など、たくひなしとおもひけん。うきみからは、いつもみなくけかしさにこそ」の給へる、いとをひらかにらうたけなり。くひなちかくなくをきゝて女君、

くひなたにおとろかさすはいかてかはあれたるやとに月をいれまし

源氏君、

をしなへてたゝくゝひなのおとろかはうはのそらなるつきもこそいれ

そのあき、すみよしにまうてたまふけるに、これみつやうの人々、「かみのしるし、あはれにめてたし」と思ひて、きこへさす。

すみよしのまつこそものはかなしけれかみよの事をかけておもへは

「けに」とおほしいてゝ、

あらかりしなみのまよひにすみよしのかみをはかけてわすれやはする

「あかしの人に、まいりあひたり」ときゝたまひて、しのひてつかはしける。

みをつくしこふるしるしにこゝまでもめぐりあひける急にはふかしな

御かへし、

かすならてなにはのことかひなきになにみをつくしおもひそめけん

「たみのこしまにてなむ、すき侍る」とあり。おりからにや、あはれにおほされて、

つゆけさのむかしにゝたるたひころもたみのゝしまのなにはかくれす

六条のみやすところ、うせたまひてのち、ゆきみそれかきくらしふるに、さい宮にきこへたまふ。

ふりみたれひまなきそらなき人のあまかけるらんやとそかなしき

御かへし、

きえかてにふるそかなしきかきくらしわかみそれともおもほへぬよに

ならひ よもきふ

すゑつむはなのめのとこ、しうといふ、つくしへいきけるに、御くしのおちたる九尺はかりなるを御くしのはこ
にいらてたまはすとて、

たゆましきすちをたつねのしたまかつらおもひのほかにかけはなれぬる

侍従、返、

たまかつらたえてもやましゆくみちのたむけのかみもかけてちかはん

はなちるさとへおはしけるみちに、かたもなくあれたるいゑのこたち、もりのやうなるに、おほきなるまつに、ふ
ちかゝりたり。月かけにうちなひきたる、風につきてなつかし。「みしこゝちするかな」とおほすは、はやう、す
ゑつむはなの御もとなりけり。こゝにはひるねの夢に、こ宮の見へたまひけるは、なこりいとかなしうおほされて、
もりぬれたるところをしのこはせ、おましなとひきつくろはせての給ける。

なき人をこふるたもとのひまなきにあれたるやとのしつくさへそふ

とて、なかめたまふほとなりけり。「またや、こゝにをはすらん」とて、これみつをいれ給ふ。

たつねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもきのもとのこゝろを

と、ひとりこち給。いらたまひて、ゆめのやうなる御ありさまを、あはれに見たまひて、

ふちなみのうちすきかたくみへつるはまつこそやとのしるしなりけれ

御かへし、つゝましけにて、

としをへてまつしるしなきわかやとをはなのたよりにすきぬはかりか

ならひ せきや

いよのすけは、ひたちになりてくたりしか、のほりけるに、せきいる日しも、源氏いし山にまいりたまひけり。女はむかし思ひいてられて、ものあはれにおほゆ。こゝろのうちに、

ゆくとくとせきとめかたきなみたをやたえぬしみつとひとはみるらん

かのむかしのこきみといふは、いまは右ゑもむのすけ、いしやまよりいてたまふ御むかへにまいりたり。めしよせて、ふみたまふ。「ひといちきりしられしは、さはおほしけんや」とて、

たまさかにゆきあふみちをたのみしもなをかひなしやしほならぬうみ

御返、

あふさかのせきやいかなるせきなれはしけきなけきのなかをわくらん

十二 ゑあはせ

六条のみやすところのさい宮アキフコノムナリを、源氏のおとゝ、うちにまいらせたまひてまつりたまへりけるに、すさく院より、をかしきものともなと、たてまつり給へりける。御くしのはこのこゝろこゝろには、

わかれちにそへしをくしをかことにてはるけきなかとかみやいさめし

さい宮の御かへし、

わかるとてはるかにいひしひとこともかへりていまもそものはいかなしき

源氏のおとゝ、うちにゑともまいらせたまはむとて、御つしあけて、女きみもろともゑらせたまふに、かのすま

あかしのゑをみつつけて、「いまゝて、みせたまはさりける」とうらみて女きみ、

ひとりゐてなけきしよりはあまのすむかたをかくてそみるへかりける

いとあはれとおほして、をとこきみ、

うきめみしそのおりよりもけふはまたすきにしかたにかへるなみたか

さい宮の女御と権中納言女御と、ゑあはせしたまひけるに、いせものかたりとさしうるとあはせて、ゑさためやらす。左、へいないし、

いせのうみのふかきこゝろをたとらすてふりにしあとゝなみやけつへき

かのすまあかしのゑは、さい宮の女御の御かたにたてまつりたまへるに、業平か名をくたすへきことをあらそひかねて、右、すけ、

くものうゑにおもひのほれるこゝろにはちいろのそこをはるかにそみる

兵衛の命婦、

「さいこ中将のなをは、くたさし」とのたまひて、中宮とも。

みるめこそうらふりぬともとしへにしいせをのあまのなをやしつめん

さい宮の女御の御かたに、院よりゑたてまつりたまふとて、

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちはわすれしもせし

御かへし、

しめのうちはむかしにあらぬこゝちしてかみよのこともいまそこひしき

あかし京へのほりけるに、入道いみしくあはれにおほえて、

ゆくすゑさきイをはるかにいのるわかれちにたえぬはをいのなみたなりけり

あま君、

もろともにみやこはいてきこのたひやひとりのなかのみちにまとはん

むすめのきみ、

いきてまたあひみんことをいつとてかかきりもしらぬよをはたのまん

ふねにてのほる。なをおもひつきせす、あまきみはなきけり。

かのきしに心をよせしあまふねのそむきしかたにさしかへるかな

むすめのきみ、

いくかへりゆきかふあきをすくしつゝうきゝにのりてわれかへるらん

のほりてかつらにすむほとに、源氏のきみ人めにつゝみて、ふともおはせぬほと、かのかたみのきむをかきならず
に、まつかせはしたなくひゝきあひたり。あまきみ、

みをかへてひとりかへれるふるさとにきゝしにゝたるまつかせそふく

御方、

ふるさとにみしよのともをこひわひてさへつるこゑとをたれかわくらん

かくてのち、おはしたり。はゝのあまきみと、ものかたりしたまふに、つくろわれたるみつのおと、かしかましく
きこゆるに、

すみなれし人はかへりてたとれともしみつそやとのあるしかほなる

ありしきむを、さしいてたり。そこはかとなく、ものあはれにかきならしたまひ、しらへもかはらす、ひきかへし、

そのおりたゝ、

ちきりしに知らぬことのしらへにてたえぬころのほとはしりきや
かへし、

かわらしとちきりしことをたのみにてまつひゝきにねをそへしかな
源氏のきみ、かつらとのおはしけるに、かந்தちめの殿上人あまた、まひりたまひて、あそひし給けるをきこし
めし、うちよりくら人の弁を御つかひにて、

月のすむかわのおちなるさとなれはかつらのかけはのとけかるらん
うらやましとあり。御返、

ひさかたのくもひかりるにちかきなのみしてあさゆふきりもはれぬやまさと
いけにあるなかしまを見たまふも、あはちのしまおほしいてられて、あはれなれ。ゑいなきとも、あるへし。

めぐりきてゝにとるはかりさやけきやあはちのしまのにあはとみしつき
中将、

うきくもにしはしまよひしつきかけのすみはつるよりのとけかるへき
又ある人、右大弁とそ、

雲のうゑのすみかをすてしよはの月いつれのかたにかけかくしけん

十四 うすくも

あかし、おほるにうちなかめてゐるたるに、ゆきかきくらしふりけるあした、ひめ君のむらさきのうへの御もとへわ
たり給はんことなど、思つゝけられて、ひめ君の御めのとに、

ゆきふかき^み山のみちははれすともなをふみかよへあとたへすして
 とのたまへは、めのとなきてきこゆ。

ゆきまなきよしの山をたつねてもころのかよふあとたえん^めやは

ひめきみわたり給とて、くるまに、「は君ものり給へ」とて、袖^{そで}をひき給ければ、

すゑとをきふた葉のまつにひきわかれいつかこたかきかけをみるへき

といひあへす、いみしくなけく。源氏のきみ、

をひそめしねもふかけれはたけくまの松にふた^{こまつ}はのかけ^{ちよ}をくら^なへむ

「^{つめにはた}いるには心のとかに」ときこへて、いてたまひぬ。源しのきみ、あかしのもとへおはせんとて、いてたまふに、

ひめ君の、御さしきぬにかりて、とにいて給ぬへければ、たちとまりて、こしらへおきて、「あすかへりこん」と、くちすさみていて給。わた殿くちにまちかけて、中将してきこへ給。むらさきのうへ、

ふねとむるをちかた人のなくはこそあすかへりこんせ^{なと}ともまぢみめ

と、いたくなれきこゆれは、こまやかにうちほゝゑみて、

ゆきてみてあすもさねこん中く^にをちかた人はころをくとも

入道^{ウスクモノ女院ナリ}の中宮うせたまへるころ、御前さくらを御覧して、花のえんの日なとおほしいつ。「ことしはかりは」など、ひとりこち給。ゆふ日のうらかなる山きはに、うすくものたなひきたるを源氏、

いりひさすみねにたなひくうす雲は物思ふそて^にのいろそま^ヤかへる

秋ころ二条院に、さい宮の女御まかりいて給へるに、つれく^ななれは、その御方にまいり給へり。御ものかたりなときこへ給ついでに、「はるあまのあはれを、いつれにか御心はよるらん」ときこえ給へは、「秋のゆふへこそ、すき給にし露のありさまもゆかしく侍れ」とあはれは、しのひあえて、

きみもまたあはれをかはせ人しれず我身にしむるあきのゆふ風

又あかしのもとにおはしたるに、いとこしけき中より、かゝり火のかけのかわにうつれる、ほたるにみえまかいて(をかしませむ)をしきを、「まして思ひかけぬことなからましかは、いかにめつらかにみえまし」とのたまふを、あかし、

いさりせしかけわすられぬかゝり火は身をうきふねやしたひきにけん

「思こそ、まかへられ侍れ」といへは、

あさからぬしたのこひちをしらねはやなをかゝりひのかけはさはけりる

十五 あさかほ

たれうきものとなかめ給ふさい院アサカホナリは御ふくにて、をりたまひしかは、源氏のおとゝつねに御ふみなときこゑ給けり。みつからもをはして、ものかたりなときこゑいれて、

ひとしれすかみのゆるしをまちしまにこゝらつれなきよをすくすかな

かへし、

なへてよのあはれはかりをとふからにちかひしことゝ神やいさめん

かへりたまひて、またつとめて、あさきりなかめ給。せむさいのあさかほの、かれくゝに、はいまきたる、ひとえたおらせ給て、さい院にたてまつり給。

みしをりのつゆわすられぬあさかほのはなのさかりはすきやしぬらん

御かへし、

あきはてゝきりのまかきにむすほゝれあるかなきかにうつるあさかほ

女五イ 式部卿宮ノヲト、アサカホノ斎院ノヲハナリ二宮にまいらたまへるに、御かとのしやうのさひてゑあけさりければ、くちすさみのやうにて、

いつのまによもきかゝとゝむすほゝれゆきふるさとゝあれしかきねそ

あさかほの宮にまいり給て、女二宮にときこゑ給。あはれなる事など、おほしつゝけたる御けはひを、むかしの源内侍のすけ、二宮にさふらひけるか、いてきて、御ときめきしてわかやく。ないし、

としふれとこのちきりこそわすられねをやのをやとかいひしひとこと
ときこゆるも、うとましうて、

みをかへてのちもまぢみよこのよにはをやをわするゝためしありとも
前齋院の御かたにまいり給て、よろつにうらみきこゑ給て、

つれなさをむかしにこりぬこゝろこそ人のつらきにそへてつらけれ
御かへし、

あらためてなにかはみへん人のうゑにかたしときゝしこゝろはかりを
ゆきのいみしうふるよ、はしちかくて、よろつのものかたり、むらさきのうゑにきこゑ給ふに、ふけゆくまゝに、
月はいよゝすみて、をもしろし。女きみ、

こほりとちいしまの水はゆきなやみそらすむ月のかけそなかるゝ
をしのうちなきたるに、源氏のおとゝ、

かきつめてむかしこひしきゆきもよにあはれをそふるおしのうきねか
いり給て大宮の事をおほしいて給て、ねたまへる夢に、いみしくうらみたまふと見て、うちおとろきて、

とけてねぬねさめひさしき冬ふゆのよにむすほゝれつるゆめのみしかさ
わか御ゆめに、「つみふかし」とのたまへる、けにさこそとおほされて、いかめしきくつくくらせ給ふにつけて
も、

なき人をにしたふ心にまかせてもかけみぬ水のせにやまとはん

十六 おとめ

式部卿ミヤ 六条院ノヲチナリアサカホノ齋院ノヲチ
大宮うせたまひて、またのとし、まつりの日、せむさい院つれくとなかめ給て、御まへなるかつらの木のしたかせ、なつかしきにつけても、わかき人々は思いつることあるに、をとより、「いかにのとかにおほさるらん」と、とふらひきこゑたまへり。「こそそのけふは、

かけきやはかはせのなみもたちかへり君かみそきのふちのやつれを」

むらさきのたてふみ、すくよかにて、ふちのはなにつけたまへり。あはれなれば御返、

ふちころもきは昨日と思ふまにけふはみそきのせにかはるよを

あふひのうへの御はらのわか君ユフキリノ大將ナリは元服して、うはみやの御もとにそおはしける。をちのおとこのことはらの御むすめも、おなしまこにて、そのみやにをほしたてけるに、このおとこきみとコノヒメキミハチシノ大臣ノムスメナリひめきみと、いみしうおもひかわしておはしけるを、ひめきみのちとおとと給て、むつかり給つ、おとこ君をよせさりけるに、よる、さうしのもとによりてきけは、ひめきみ、「くもるのかりも、わかことや」と、ひとりこち給を、をとこきみ、

さよなかにともよひわたるかりかねにうたてふきそふをきのうはかせ

「みにそしみける」なと思つゝけて、宮の御前にふしたまひぬ。このひめきみを、ちとおととむつかりて、との。たまひけるに、宮の御かたにかたりたまへるを、をとこきみわりなくて、まきれよりたまへるけしきをみて、ひめきみの御めのと、「ものゝはしめに六るすくせよ」といふをきつて、おとこきみ、

くれなるのなみたにふかきそでのいろをあさみとりとやいひしをるへき

との給へは、ひめきみ、

いろ／＼にみのうきほとんしらるゝはいかにそめけるなかのころもそ
いひもはてす、とのいりたまひぬ。くわさの君またあけほのに、いてたまふ。そらのけしきもいたくゝもりて、ま
たくらかりけり。

しもこほりうたてむすへるあけくれにそらかきくらしふるなみたかな

ことしは、との五節たてまつり給。まひゝめに、これみつかいつきむすめをめすに、こゝろやましなからまいらす。
その夜になりて、まいらせたり。くわさの君くるまのところにおはして、をろしたまふに、たゝかのひとの御ほと
にゝて、いますこしほそをかしかければ、たゝもあらず、きぬのすそをならしたまふに、なにこゝろもなくあやし
と思。くわさの君、ハラキリノ太極

あめにすむハマスとよをかひめのもろ人もわかこゝろさすしめをわするな

「みつかきの」との給そ、うちつけなる。かくて、まひゝめともまいりたるに、「をとゝのと大納言のとは、すく
れたり」など、ほめのゝしるを、をほとんまいりてみ給に、むかしおほふめとまりて、おとめのすかたまつおほし
いつ。たつの日のくれつかたにや、すまの御たひるにゆきちかひしひとにつかはす。御ふみのうち思ひやるへし。
おとゝ、

をとめこもかみさひぬらんあまつそらてふるきよのともよはひへぬれは

あはれをは、しのひたまはぬはかり、をかくしうおほせるもはかなし。御かへし、

かけていへはけふのことゝそおもほゆる。かけひのしものそてにとちけしも

あをすりのかみに、よくとりあへて、かきまきはしたり。これみつかこの殿上して、をさなきかあるを、くわさ
のきみめしよせて、かのまひゝめかり、ふみやり給。

ひかけにもしるかりけめやおとめこあまのはそてにかけしこゝろは

まさらきの廿日あまりに行幸あり。さくらはまたしきほとなれと、やよひは御き月なれば、とくひらけたるさくらのいろをかしく、かくともよりはしめてありふるほとに、むかしの花のゑんの日おほしいて、院のうへ、「また、さる物みてむや」との給。源氏のおと、院のかわらけ給ふとて、

うくひすのさゑつるこゑはむかしにてむつれしはなのかけそかわれる

院御かへし、

こゝのへのかすみへたつるかきねにもはるをつけたるうくひすのこゑ

兵部卿源ノヲトいまのうゑの御さかつきまいりたまふとて、みこ、

いにしへをふきつたへたるふゑたけにさへつるとりのねさへかはらぬ

と、あさやかに申給ようい、とめてたし。

うくひすのむかしをこふるさへつりもこつたふはなのいろやあせたる

源氏のおと、京極殿に人々やりて、われもすみたまへり。むらさきのうへはるの御方、はなちるさと夏の御方、あかし冬の御方、みなかたにしたかひてみすたまふ。中宮イキコノミナリの御方より、むらさきのうゑの御もとへ、はこのふたに、もみちいろくくにませて、をかしきわらはして御せうそくには、

こゝろからはなまつハナマツやとはわかヤトたのもみちをかせのつてにたにみよ

むらさきのうゑ、五えうのゑたに、

風にちるもみちはうカゑしはなカのいろをいはねのまつにかけてこそみめ

十七 たまかつら

教仕太政大臣ノムスメナリ
ゆふかほのひめきみの、めのとにくして、つくしへくたるに、ふねにのりて、ふなことも、「うらかなしうも、と

をくきにけるかな」とうたふを、めのとこの女房ふたりあるかうた、

ふなひとまたれをこふとかをほしまのうらかなしけにこゑのきこゆる

これは、をなし。

こしかたもゆくへもしらぬをきにいて、あはれいつくときみをこふらん

かくてとし月ふるほとに、このきみも廿はかりになりぬ。少貳といひしは、わつらひてうせしかは、とみにもゑのほらぬほとに、かのくに、一のものにて、つてなとあるつは物、かたちきよけなるむすめなけりときゝて、いひわたりけるを、いとまかくしくゆくしうおほしけり。つわ物、これにきたり。ひめ君せめわひて、このむさ、

きみにもし心たかは、まつらなるか、みの神もかけてちかはん

「このほとは、つかうまつりたるとおほゆ」とて、ほのゑみたるも、よつかすおほゆ。むすめ、(むすめにカ)「とくくよめ」といへは、「おほえす」とて、ゑたれは、

としをへていのるころのたかひなはか、みのかみをつらしとやみむ

かまへて、のほり給ぬ。御めのとこ、かのくに、そうひろくなりて、ゑのほらぬを、かなしと思けり。

うましまをこきはなれてもゆくかたやいつくとまりとしらすもあるかな

ゆくさきもみえぬなみちにふなてして風にまかするみこそうきたれ

思かたに、かせふきつけつ。ひ、きのなたを、なたをかになとうたふ。かいそく、なにことよりも、かれか、をひていそきくる、と思もかなしくて、

うきことにむねのみさわくひ、きにはひ、きのなたもさわらさりけり

とそ、の給ける。かくてのほりて、はつせにまいり給へるに、かのむかしのうこむ、まいりあひたりけり。むかしものかたりなとして、うこむ、

ふたもとのすきのもとたち。たつねすはふるかはのへにきみをみましや
 「うれしきわさにも」ときこゆ。ひめきみ、

はつせかははやくのことはしらねともけふのあふせにみさへなかれぬ

うちなきてをはするさま、うつくしけなり。うこむ、おとこの御もとにかへりまいりて、「かうくの人をこそ、
 たつねいてさふらへ」ときこゑさすれば、「いとあはれなることかな。なにか、ちとおとにはまきこゆる。い
 とおほくもち給て、もてわつらひたまひぬるに、たごにたつねきこゑて、つれくのなくさめにも、かしつか
 む」とのたまひて、「かのすゑつむはなのやうにて、しつみをいゝて給らんは、いといふかひなからん。まつ、ふ
 みやりて、かへりことをみむ」とおほして、あるへかしう、すこしかき給て、おと、

しらすともたつねてしらんみしまへにをふるみくりのすちはたえしを
 ひめきみ、かへし、

かすならぬみくりやなにのすちなれはうきにしもかくねをとめけん

このひめきみ、むかへとり給つ。わたり給てかへりて、むらさきのうへの御かたにて、ありさまなとかたりて、さ
 てならひに、

こひわたるみはそれなれとたまかつらいかなるすちをたつねきぬらん
 さて、たてまつりたまへる御返に、すゑつむ、

きてみれはうらみられけりからころもかへしやりてんそてをぬらして
 をと、うしとおほしたり。

かへさんといふにつけてもかたしきのよるのころもおもひやるかな

ならひ はつね

としかへりてついたちに、むらさきのはるの御方のありさま、いへはおろかなり。かゝみゝ給をり、とのさしよりて女きみに、

うすこほりとけぬるいけのかゝみにはよにたくもりイたくひなきかけそならへる
うへ、

くもりなきいけのかゝみによろつよをすむへきかけそしるくみゑける

おとゝ、あかしのひめきみの御方にわたり給へれば、ゑならぬこゑうのえたにうつるうくひすも、こゝろあらんか
しとみゑたるに、あかしの御方、

としつきをまつにひかれてふる人にけふうくひすのはつねきかせよ

「をとせぬさとの」ときこゑたまへり。としつきのへたゝるを、おとゝ(ママ)ち(ママ)にこゝろくるしう御覧す。ひめきみの御
かへし、

ひきわかれとしはふれともうくひすのすたちしまつのねをわすれめや

おとゝ正音ゆ百世ふくれに、あかしの御方へわたり給へり。ありつるこまつの御かへしを見けるまゝに、あはれなるふるこ
とゝもをかきませつゝ、かたはらにあかしのきみ、

めつらしききはなのねくらにこつたひてたまにのふるすをとつるうくひす

かくておとゝ、すゑつむはなの御かたにわたりたまへり。ふりせぬ御かたち見たまふに、いとかたはらいたし。御
まへのこうはいのさきいてたるに、見はやすひともなきを見わたし給て、

ふるさとの春むめの春こすゑにをたつねきてよのつねならぬはなをみるかな

ならひ ことう

むらさきのうへの御方の女房とも、御前のいけのふねにのりて、あそひあひたり。えもいはぬいりえのやまふき、きしのふちなみ、ゑやうにもかゝせまほし。まことに、をのゝえもたへぬへくおほえて、ひをくらす人々のうたなり。

かせふけはなみのはなさへいろみえてこやなにたてるやまふきのはな

はるのいろやいてのかはせにかよふらんきしはやまふきそこもにほへる

かめのうへのやまもたつねしふねのうちにをいせるなをはこゝにのこして

はるのひのうらゝにさしてゆくふねはさをのしつくもはなそちりける

源氏ノヲトモトハツツノミヤト申
兵部卿宮に御かわらけ、しるきこへ給へは、「おもふこゝろの侍らさらましかは、にけなまし。いとたへかたし」とて宮、

むらさきのゆへをこゝろにしめたればふちにみなけんなかはをしけき

「をなしかさしを」とて、ほゝえみておとゝ、

ふちにみをなけつへしやとこのはるははなのあたりをたちさらすみや

中宮へ、きのみと経のはしめの日、むらさきのうへの御こゝろさしにて、ほとけに花たてまつり給へり。花かめに

さくらをさして、ことうをは、こかねのかめに、はなさまいかめし。ゑもいはぬわらはにもたせて、殿の中將して、

はなそのゝことふをさへやしたくさにあきまつむしはうとくみゆらん

中宮の御かへしに、「きのふは、ねになきぬへうこそ」とて、

ことふにもさそはれなましこゝろありてやへやまふきをへたてさりせは

をとゝ、ゆふかほのひめきみの御かたにわたり給へり。おほししもしるく、わかき人々の御ふみおほかるなかに、

はなたのかみの、なつかしうしみふかきを、いとほそちひさくむすひたるあり。「これ、いかなるか、くむすほれたるにか」とてひきあげたれば、殿中将カシハキナリ、

おもふともきみはしらしなわきかへりいはもるみつにいろしみえねは

「おもひあはすることもこそあれ。いたくなはしたなめそ」とのたまひて、わらひたまふ。かやうにものなときこへ給ついてに、たゝならぬやうなり。御まへなるくれたけの、うちなひきたるさまなつかしけに、たちより給て、おとゝ、

ませのうちにねふかくうへしたけのこのをのかよゝにやをひわかはるかるへき

「おもへは、うらめしかるへきことそかし」と、きこへ給へは、女、

いまさらにかなるよにかくれたけのをいはしめけんねをはたつねん

おとゝ、つねにわたり給つゝきこへ給を、「うきおやの御をやの御こゝろかな」とおほす。はこのふたに、たちはなのあるを、まさくりたまひて、ちかき御けはひなどの、はゝにゝたれば、おとゝ、

たちはなのかほりしそてによそふれはかわれるみともおほゝえぬかな

女君、

そてのかによそをふるからにたちはなのみさへはかなくなりもこそすれ

をとゝの御もとより、御ふみたてまつり給へり。「御けはひにそ、つらきもわすられかたく」とて、

うちとけてねもみぬものをわかくさのことありかほにむすほゝるらん

ならひ ほたる

兵部卿の宮、ゆふかた、たちより給て、宰相の君して、きこえわひ給。みや、をくのかたをみいれたまへは、には

かにひかるものあり。きとけたれぬるを、あやしうおほせは、ほたるをとりあつめて、き丁のかたひらに、をとゝのつゝみ給へるなりけり。みや、

なくこゑもきこえぬむしの思ひたに人のけつにはきゆるものかは

御かへしはかりなりとて、

こゑはせてみをのみこかすほたるこそいふよりまさる思ひなるらめ
このひめきみの御もとに、このみや五日、御ふみたてまつりたまふ。

けふさへやひく人もなきみかくれにをふるあやめのねのみなかれん
御かへし、ひめきみ、

あらはれていとゝあさくもみゆるかなあやめわかすなかれけるねの
をなしひ、はなちるさとの御方に、おとゝわたり給て、ものこらんす。としころ御あそひは人つてなりつるを、け
ふはめつらしくおほす。女きみ、

そのこまもすさめぬくさとなにたてるみきはのあやめけふやひきつる
をとゝ、

にほとりかけをならふるわかこまはいつかあやめにひきわかるへま
ゆふかほのひめきみに、よろつきこえしらせたまひて、おとゝ、

おもひあまりむかしのあとをたつねれはをやにそむけるこそたくひなき

「ふけうなるは、ほとけのみちにも、いみしうこそいひたなれ」とのたまへは、かほをひきいれ給を、かきやりて、
うらみたまふか、むつかしければ、ひめきみ、

ふるきあとをたつねれとけになかりけりこのよにかゝるをやのこゝろは

ならひ となつ

ゆふかほのひめきみの御まへに、となつのおほかるを、おとゝをらせ給て、

なてしこのとなつかしのいろをみはもとのかきねを人やとかめん

「ことわつらはしさにこそ、まゆこもりも、こゝろくるしうおもひきこゆれ」とあれは、うちなき給て女きみ、

やまかつのかきねにおひしなてしこのもとのねさしをたれかたつねん

うちのおとゝのいまひめきみ、こきてんにたてまつり給。

くさふかみひたちのうらのいかゝさきいかてあひみんたこのうらなみ

女御レセイキムノ女御カシハキノイモツトうちみてほゝえみて、うちおき給へれば、中納言のきみとてさふらふ人、「いとおかしき御ふみのけしきみる」

と、ゆかしう思ひたれば、「やかて返事かき給へ」とゆつり給へは、中納言きみ、

ひたちなるするかのうみのたこのうらになみたちいてよはこさきのまつ

ならひ かゝりひ

おとゝ、ゆふかほのひめきみの御かたにわたり給て、「月なきころはと、かゝりひともしつゝけよ」などの給。を

とゝ、

かゝりひにたちそふこひのけふりこそよにはたへせぬほのをなりけれ

女きみ、「あやしのありなまや」とおほして、

ゆくゑなきそらにけちてよかゝりひのたよりにたくふけふりとならば

ならひ のわき

のわきのいみしうするひ、をとゝはかた／＼にわたり給。あかしの御かたにわたりたまひて、かせのとふらひはかりにて、かへり給。心やましけなり。女、

おほかたにをきのはすくるかせのをともうきみひとつにしむこゝちして

と、ひとりこちけり。ゆふかほのひめきみのかたに、わたりたまひぬれば、れいのかせのとふらひにも、むつかしきことゝもあり。いかなることか、ありけん。女、

ふきみたるかせのけしきにをみなへししほれしぬへきこゝちこそすれ

をとゝの御いらへ、

したつゆになひかましかはをみなへしあらかせにはしほれさらまし

ユラキリナリ中將、あかしのひめきみの御かたにまいりたまひて、御すゝりかみなど申て、女のかり、ふみかき給。えならぬむらさきのかみにて、かるかやにつけたまへは、「など、かたのゝ少將は、かみなとのいろをこそ、とゝのへ侍りけれ。いつれのわたりの御ふみにか」など、いひしろふ。フキミタリケルカルカヤニ
ツケタタマヘリさてかくそ。

かせさはきむらくもまよふゆふへにもわするゝまなくわすられぬきみ

ならひ みゆき

大原野レセイキムにみゆきしたまふ。六条の院より御みやう御みまかのもの、たてまつりたまへるに、きしひとつかひ、蔵人の左衛門佐を御使にて六条院にきこえ給。御せうそくには、

ゆきふかきをしほの山にたつきしのふるきあとをもけふはたつねよ

おとゝの御かへしを、けしきことにもてなしたまふ。御返しには、

をしほ山みゆきつもれる松はらにけふはかりなるあとやなからん

ゆふかほのひめ君、ものみたまひてかへり給へるに、おとゝ御ふみきこへ給。「きのふのうへの御かたちは、みたまひけんや。この事は、なひき給ぬらんや」と、きこへ給へり。御かへしには、

うちきらしあさくもりせしみゆきにはさやかにそらのひかりやはみし
をとゝの御かへし、

あかねさすひかりはそらくもらぬをなとかみゆきにめをきらしけん

このひめきみ、もきせさせ給ついでに、このをとゝを御こしゆひにとて、かくとしらせたまひつ。ひめ君の御もとに御くしのはこ、きよらにして、たてまつらせ給ついでに、うは宮、

ふたかたにいひもてゆけはたまくしけわかみはなれぬかけこなりけり
すゑつむはな、ひめきみの御さうそくたてまつりたまふ。うちきのたもとに、かきつけ給。

我身こそうらみられければころもきみかたもとなれすとおもへは
おとゝの御かへし、

から衣またからころもからころもかへすくもからころもかな

「このみたまふすちのことなり」とて、御もきよになりて、ちゝおとゝまいり給へり。「いまゝて、かくれしのひさせたまひつらんかしこまりは、いかてか申さゝらん」とて、おとゝ、

うらめしやをきつたまもをかつくまでいそかくれけるあまのこゝろよ
なを、つゝみあへ給はず、しほたれたまひぬ。御かへし、ひめきみ、

よるへなみかゝるなきさにうちよするあまもたつねぬもくつとそみる

ならひ ふちはかま

ゆふかほのひめきみ、内侍のかみになり給ぬ。その御ともに、源氏のおとゝの中将ちゅうかほまいり給へり。まことの御こならすと、きゝあらはしてのちは、たゝにもあらぬなるへし。らんの花をまいらせ給へは、とたま(とりか)ふ女の御そてを、ひきうこかして中将、

おなしのゝつゆにやつるゝふちはかまあはれはかけよかことはかりも御かへし、ひめ君、

たつぬるにはるけきのへのつゆならはうすむらさきやかことならましゆふかほのないしのかみの御もとに、まことの御せうとの中将かしわきまいり給へり。おとゝの御つかひにて、まいり給へるを、人つてなる御せうそくを、うらみきこへ給へは、「うちつけなるやうにやは、むつひきこえん」と、すくよかにみつからのたまへは、をしこめて中将、

いもせ山ふかきみちをはたとらすてをたへのはしをふみにまとひける「すかさせ給ける」と、うらむるも人やりならず、ひめ君、

まとひけるみちをはしらていもせ山たとくしくそたれもふみゝし左大将ひげくろは、「月たゝは、さやうにも」と、きこへたり。

かすならはいとひもせましなか月にいのちをかくるほとのはかなそさまた宮より、兵部卿 源氏をとゝ、

あさひさすひかりをみてもたまさゝのはわけのしもをけたすもあらなん左兵衛むらさきのうへのせうとのかみのもとより、

わすれなんと思ふものからものかなしきはいかさまにをしていかさまにせん

ないしのかみの御かへし、みやの、

こゝろもてひかりにむかふあふひたにあさをくしもをゝのれやはけつ

ならひ まきはしら

このないしのかみを、おほくいひしなかに、大将ヒケク、弁といふ女房をかたらひて、いりたまひにけり。大将のいてたるまに、源氏のおとゝ、こなたにわたり給て、うへにきこえさせ給。

をりたちてくみはみねともわたりかはひとのせとはたちきらさりしを

かへし女、

みつせかはわたらぬさきにかてなをなみたのかはのあはときえなん

大将モトノミハ先帝ノ兵部卿ノムスメナリ、もとのうへのもとに、こなむとみむとおほして、わたりたまへるに、ものゝけにうつし心もなまきうへにて、ひとりのはひをうちかけたりければ、こゝろはつかしき御あたりに、ひむのわたりもいとみくるしとて、えわたりたまはて、つとめて御ふみきこえ給。

こゝろさへそらにみたれしゆきもよにひとりさへつるかたしきのそて

御かへし、なし。大将ひかりてうせ給に、侍従といふ女房、

ひとりゐてこかるゝむねのくるしきにおもひあまれるほをとそみし

かへし、

うきことをおもひさわはさまくにくゆるけふりといとちそふ

「大将君は、かれ給ぬへきなめり」とて、もとのうへ、みやへわたりたまひぬ。おほくのとしころ、てならひて、いまはのきさめに、またかへりわたり給。いとうしと、おほしたり。ひめきみの十二三はかりなるぞ、をはする。

ひわたいろのかさねにかきて、はしらのひわれたるはさまに、かうかいしてをしいれ給。ひめきみ、

いまはとてやとかれぬらんべともいなれきつるまきのはしらはわれをわするな

はきみ、

なれきとは思ひいつともなによりたちとまるへきまきのはしらそ

もくのきみは、との御かたの人にてとまるに、中將のをもと、かくいふ。

あさけれといしまの水はすみはてやともるきみやかけはなるへき

「思かけさりしことなり。かくて、わかれたまひぬることよ」といへは、

ともかくもいはまの水のむすほれかけとむへくもおもほえぬよを

このないしのかみ、うちに、たうかにまいり給へり。兵部卿豊良ノヲトの宮しのひて、ないしのかみにきこえ給へり。

みやまきにはねうちかはしいるとりのまたなくねたきはるにもあるかな

ないしのかみの御かたに、うへセイキムわたり給へり。いとなつかしう、めてたき御ありさまのはつかしさに、御いらへも

きこえたまはねは、「あやしう、おほつかなきわさかな。よろこひなとも思しりたまふらんと思ことあるを、きこ

いれたまはぬさまにのみあるは、かゝる御すくせなりけり」と、のたまはせて、

なとてかくはひあひかたきむらさきをこゝろにふかくおもひそめけん

御かへし、ないしのかみ、

いかならんいろともしらぬむらさきをこゝろしてこそ人はそめけれ

わりなく、せめわたらせ給も、わつらはしければ、まかりてたまひなんとするに、とみにゆるし給はず。大將も、

さふらはせ給。「このちかきまもりこそ、むつかしけれ」と、にくませ給。うへ、

こゝのへにかすみへたてはむめのはなたかばかりもにほひこしとや

かへし、ないしのかみ、

かはかりはかせにもつてむはなのえむたちならふへきにほひなくとも

はれまなきつれ／＼におほしいて、おと／＼は、うこむかもとにしのひて御ふみつかはす。この人のおもはむ事おほすに、なに事もゑつ／＼けたまはて、思はせてかくなん。

かきたれてのとけきころのはるさめにふるさと人をいか／＼しのふや

女きみ御かへし、

なかめするのきのしのふにそてぬらしたかた人をしのはさらめや

ないしのかみのもとに、かりのこのいとおほかるを、かうし、たちはな／＼とのやうにまきはして、おほつかなきさまなど、をやさまにかきて、

をなしすにかへりしかひのみえぬかなるひとかてに／＼きるらん

「御かへし、まろきこえん」と、大将のかはるも、いとかたはらいたし。

すかくれてかすにもあらぬかりのこをいつかたにかはとりかくすへき

いとをかしきあきのゆふくれに、うちのおと／＼、こきてむの女御の御かたに、こゝろことなる殿上人、をと／＼の中将のきみなとまいりたまへり。をかしきほと拍子あはせなり。いか／＼さきみたれたりしいまひめきみは、この

御かたにそあらせたまひける。人よりけにゐいて、中将のきみ、はなやかによみかく。

をきつふねよるへなみちにた／＼よは／＼さをさしよらんとまりをしへよ

「たな／＼しをふね、あなわひしや」といふ。いとかたはらいたしと、おほいたり。かへし、よるへなみかせのさはかすふな人もをはぬかたにいそつたひせす

十八 むめかえ

あかしのひめきみの御もきのことありて、御かた／＼よりたき物あはせて、たてまつらせたまへり。せむさいるん源氏ノイモットより、るりのつほにいれて、かれたるむめのゑたにつきて、こゝろはへかくなん。

はなのかはちりにしゑたにとまらねとうつらんそてにあさくしまめや

兵部卿キリツホノ第三皇子のみやまいりあひ給て、御ふみいみしうゆかしかり給へは、せちにかくさせ給。「なにことか、はへらん。くま／＼しくおほしなすそ、くるしけれ」とて、御すゝりのついでに、

はなのえにいとゝこゝろをそむるかな人のとかめんかをはつゝめと

とにやあらんと、まうしたまふ。月さしいてぬれは、宮おとゝ中將など、御こと、わこむなんと、かきしらふるほとをかし。弁カシワキの少將拍子をとりにて、むめかえいたしたるこえなとをかし。御かはらけまいるに、みや、

うくひすのこゑにやいとゝあくかれん心しめつるはなのあたりをヒヤ

「ちよもへぬへし」と、きこえ給へは、をとゝ、

いろもかもうつるはかりにこのはるにはハなさくやとをかれすもあらなん

頭中將カシワキにたまふとて、宰相中將にさす。

うくひすのねくらのえたもなひくまでなをふきとをせよはのふゑたけ

宰相中將ニツキリ、

こゝろありてかせのよくめる花のえにとりあえぬまでふきやよるへき

とあるを、「なさけなくや」とて弁少將、

かすみたに月とはなとをへたてすはねくらのとりもほころひなまし

兵部卿ヒヤみやかへらせ給に、御さうそくひとくたり、このたきものふたつほ、御くるまにたてまつらせ給へは、みや、

はなのかをえならぬそてにうつしもてことありかほやまりといもやとかめん
御かへし、おと教、

めつらしとふるさと人もまちそみむはなのにしきをきてかへるきみ
おとのひめきみの御もとに宰相中将ユラキリ、

つれなさはうきよのつねになりぬるゆくイをわすれぬ人やひとにことなる
ひめきみ、かへし、

かきりとてわすれかたきをわするもこやよになひくころなるらん

十九 ふちのうらは

教在太皇うちのおと、四月一日ころに、御前のふちの、えもいはず、いろこくをもしろきををり、あそひなとしまひて、
わか御この頭中将を御つかひにて御せうそくきこへ給。「御いとまあらは、たちよらせ給なんや。をかしきほと
ゆふはへも、御らんしはやすはかり」と、きこへ給へり。おとは、「よもはかなきに、このひめきみ、またおも
ふさまなることもや」と、おほしなるなりけり。おとの御ふみには、

わかやとのふちのいろきたそかれにたつねやはこぬはるのなこりを
宰相ユラキリのきみ、ころときめきせられて、かしこまりきこへ給へり。御かへしには、

なかくにをりやまとはんふちのはなたそかれときのたくしくはに

宰相中将ひきつくろひて、わたり給ぬ。いたくまたれて、まことにをもしろきはな、もてあそひ給。ことにふさな
かくおもしろきを、まらうとの御さかつきにとりくはへてなやむに、うちのおとは、「ふちのうらはに」と、すし
たまひて、

むらさきにかことはかけんふちのはなまつよりすきてうれたけれとも

宰相さかつきをもちてしき(けしきカ)はかり、はいしたてまつり給さま、いとよし。宰相中将、

いくかへりつゆけきはるをすくしきてはなのひもとくをりにあふらん

「御この頭中将に」と、のたまへは、

たをやめのそてにまかへるふちの花みるひとからやいろもまさらん

宰相中将はほけくしきておもひわたり給へとも、さとてひとはわかたさまにはとおほし(おほしカ)きを、女かたさまよりま

けて、よろつにかしつきいれられぬれば、思ことなくうれし。女きみ、みきこゆるにつけても、ゆめのやうにおほ

ゆ。「弁の少将すゝみいたしつる、あしかきのをもむきには、みゝとゝめたまひつれ」と、宰相とのゝたまへは、

女クモキヲカリトヒシ人いとぎゝにくしとおほして、

あさきなをいひなかしつるかはくちはいかゝもらしゝせきのあしかアハライき

すこしうちわらひて、宰相のきみ、

もりにけるくきたのせきをかはくちのあさきにのみはおほせさらなん

宰相のきみ、あしたの御ふみ、「かゝ(つみせカ)せざりつる御けしきに、なかゝおもひしらるゝことのほと、たへぬこゝろ

に又きゑぬころとなん。

とかむなよしのひにしほるてもたゆみけふあらはるゝそてのしつくを」

まつりの近衛つかひは、頭中将そしける。宰相中将いてたつところに、おはしたり。うちとけあはれをかはし給ふ

るなかなれば、うらやむことなくさたまり給ぬるも、たゝならずおもひけり。宰相、

なにとかやけふのかさしよかつみつゝおほめくまでもなりにけるかな

かものまつりの女つかひに、これみつかむすめ、ないしのすけわたりけり。そのいてたつところに、ともあり。中

將カシハキ、

かさしてもかつたとらるゝくさのなはかつらををりしひとやしるらん

「はかせならては」と、きこえたり。宰相中將、中納言になり給ぬ。まくのはなのおもしろくうつろひたるをみ給て、うへのめのとに中納言ユツキリ、

あさみとりわかはのきくをつゆにてもきむらさきのいろとかげきや

「つらかりしことはこそ、わすられね」と、ほゝえみての給へははつかしうて、めのと、

ふたはよりなたかきこたかきそのゝきくなればあさきいろわくつゆもなかりき

中納言はうへくして、うはきたのかたのをはせし六条とのにわたりてをはず。あれたるところつくろはせ、やりみつかきやりなとし給へり。との、うへ、ふたりをひいてたまひしをり思いてゝ、ふたところなかめて中納言、

なれこそはいわもるあるしみし人のゆくへはしるやゝとのまし水

女きみ、

なき人のかけたにみえぬすつれなくてこゝろをやれるいさらゐのみつ

中納言、うへくして三条にをはするほとに、うへのちゝのうちのをとゝ、わたりたまひて、御てならひのうたともを見たまひて、おとゝカシハキノチ、

そのかみのをひきはむへもくちぬらんうへしこまつもこけをひにけり

中納言さいしやうのめのと、つらかりしこゝろはへもわすれねと、したりかほにかく、

いつれをもかけとそたのむふたはよりねさしかはせるまつのすゑく

十月廿日あまりのほとに、六条院源氏に行幸あり。朱雀院も御幸あり。あるしの院なに事をして御覽せさせむと、めつらしきみゆきをまちよろこひたまふに、「かく所の人めせ」とのたまふ。人にはにす、なまめかしきほとに、う

へのわらわへに、まいつかうまつる。すさく院のもみちのかなと、れいのふることゝもおほしいてたるに、おほき
 おとゝの御この十はかりなる、せちにおもしろくまふに、御かと御衣たまふに、おとゝをくりてふたうしたまふ。
 あるしの院、きくををらせ給ふに、せいはいはのをりおほしいてゝ、あるしの院（をりてか）、

いろまさるまかきのきくもをりくゝにそてうちかけしあきをこふらし

御かへし、おとゝ（整住）、

むらさきの雲にまかへるきくの花にこりなきよのほしかとそみる

朱雀院御製、

あきをへてしくれふりゆくさと人もかゝるもみちのおりをこそみね

御かと（冷泉）、

よのつねのもみちとやみるいにしへのためしにしけるにはのにしきを

廿 わかな

すさく院（女三宮ナリ）の女三宮御もきのこと、いかめしうおほしをきてたり。その日になりて中宮より御さうそく、ゝしのはこ、
 心ことに、てうせさせ給て、かのむかしの御くしあけの、ゆへあるさまにあらためて、なかに、

さしなからむかしをいまにつたふれはたまのをくしそかみさひにける

院あはれに御覧しつけて、おほしいつることやありけん。

さしつきにみるものにもかよろつよをつけのをくしのかみさふるまで

源氏の院よそけになり給に、ひけくろの大將のうへのないしのかみ、正月十三日ねの日にあたりたるに賀し給に、
 わかきみ二人ひきくしてまいりたまひて、

わかはず野へのごまつをひきつれてもこのいはねをいのるけふかな
御かへし、かはらけとり給て源氏の院、

ごまつはらすゑのよはいにひかれてやのへのわかかなもとしをつむへき

朱雀院のひめみや、六条院の御あつかりになり給にちとそきこえさせたまへるほと、いとめてたし。三日まではよ
かれあるまじきを、院はいとわりなけにおほしたり。むらさきのうへにより、われなから、かくうけとりきこえん
事こゝろつきなくおほす。御すゝりひきよせ給て、むらさきのうへ、

めにちかくうつれはかはるよのなかをゆくすゑとをくたのみけるかな
まことならねと、けにとおほさるゝ。ことわりにて院、

いのちこそたゆともたえめさためなきよのつねならぬなかのちきりを

四日といふよは、むらさきのうへの御かたに院をはしまして、つとめて、かの御かたにたてまつり給。

なかみちをへたつるまてはなけれともこゝろみたるゝけさのあはゆき

むめにつけたまへり。御かへし、

はかなくてうはのそらにそきえぬへきかせにたゝよふはるのあはゆき

むらさきのうへに朱雀院の御ふみあり。「おさなきひとの、こゝろなき御ごとにてものし給らむを、うしろみたつ
ねおほすへきゆへもや侍らむ」とて、すさく院、

そむきにしこのよにのこる心こそいるやまみちのほたしなりけれ

「やみをえはるけてきこゆる、をこかましよう」とあり。御かへし、むらさきのうへ、

そむくよのうしろめたくはさりかたきほたしをしるてかけなはなれそ

すさく院、かくて山てらにいりをはしぬれば、女御たちなどのわかれたまふも、いとこゝろほそくてゐたまへると

ころに、六条院いたくけさうしてわたりたまへり。むかしいまのものかたり、あはれなどは、かきつくすへうもなし。このなかされたまひにしほのことなど、いまはをとなくきこえ給にしを、かくてのみやはと、ひきうこかして、

とし月をなかにへたてゝあふさかのさもせきかたくをつるなみたか

女、

なみたのみせきとめかたきしみつにてゆきあふみちははやくたえにき

そのよのなかのあはれは、すへてをろかならさりけんかし。院あかつきいてたまはんとて、えもいはすさきかゝりたるふちの花を、をらせたまひて、源しのるむ、

しつみしもわすれぬものをこりすまにみもなけつへきやとのふちなみ

かへし、ないしのかみ、

みをなけんふちもまことのふちならはかけしやさらにこりすまのなみ

むらさきのうへ、かくふるきことをもとりかへし、またこのひめみやなどの御ことも、わくるさまなるを、ものなけかしうなにとなくおほされて、御てならひにむらさきのうへ、

みにちかく秋やきぬらんみるまゝにあをはの山もうつろひにけり

御めとゝめ給て、源氏の院、

みつとりのあをはゝいろもかはらぬをはきのしたはそけしきことなる

ことにふれて、ものなけかしけなる御けはひのもれいつるを、をとなしうもてなしたまふを、ありがたくおほす。あかしのひめきみは女御にまいり給て、淑景舎とこそは申めれ。人すくなゝるに、うはのあまきみ、いとちかくまいりよりて、むかしのものかたり、むまれたまひしさまのはかなかりし、またかのにうたうの、いまたいきて侍こ

となときこえて、しくれるたり。はうへまいりたまひて、「あな、みくるし。かたはらいた」と、めくはすれと、
 きかす。あまきみ、

をひのなみかひあるそらにたちいて、しほたる、あまをたれかとかめん
 御すゝりなるかみに女御、

しほたる、あまをなみちのしるへにてたつねもみはやはまのとまやを
 あかしの御かた、えしのひあえたまはて、

よをすて、あかしのうらにすむ人もこゝろのやみははるけしもせし

はことり

まりつほの女御、おとこ宮うみたてまつり給へるよしを、あかしのにうたう、ほのかにきゝて、御かたのもとに、
 むかしのゆめ、くわむはたしたまふへきよしなと申て、「ふかきやまに、こもりなん」と申つゝ、

ひかりいてんあかつきちかくなりにけりいまそみしよのゆめかたりする

六条院に大将、うゑもんのかみなとまいりて、あそひし給ついでに、ねこのつなのなかきにか、みすをひきあけた
 るより、女三宮をほのかにみたてまつりて、かへりいつるくるまに、大将うゑもんのかみのりて、宮の御ことをな
 を、いはまほしさに、うゑもんのかみ、

いかなれははなにこつたふうくひすのさくらをわきてねくらとはせぬ

大将、「あちきなものあつかひや」とて、

みやま木にねくらさためやはことりもいかてかはなのいろにあくへき

ねこのつなのゆかりに見たてまつりてのち、ひとしれぬこゝろしのひかたくて、こしうのきみのかり、つかはし

ける。

よそにみてをらぬなけきはしけれともなこりこひしき花のゆふかけ

とあれと、侍従、「たゞ、よのつねのなかめにてこそは」と思て、「みすもあらぬやいかに。かけくし」とかきたり。かへし、

いまさらにならぬにそやまさくらをよはぬえたにこゝろかけきと

わかなの下

うゑもんのかみ、ねこのなつかしさもひとやりならて、朱雀院學東宮、女三宮の御せうとおはしませは、ねこをけうせさせ給へは、きりつほの女御との御ゆかりにめして、けふせさせ給を、うゑもんのかみ申あつかりて、ともすれはきぬのすそにまとはして、ねうくといふもうたてくて、うゑもんのかみ、

こひわふる人のかたみとてならせはなれよなにとてなくねなるらん

むかしの願はたしにひきつれて、すみよしにまうてたまへるに、おほしいつることおほくて、源氏の院、たれかまたこゝろをしりてすみよしのかみよをへたるまつにことゝふ

かへし、あかしのうへ、

すみのえをいけるかひあるなきさとはとしふるあまもけふやしるらん

あまきみ、しのひて、

むかしこそまつわすられねすみよしのかみのしるしをみるにつけても

と、ひとりこちけり。むらさきのうへ、みならひ給はぬところなれば、いとめつらかにおもしろしとおほして、

すみよしのまつによふかくおくしもはかみのかけたるゆふたすきかも

たかむらのあそむの、ひらのやまさへいひければ、まつりのこゝろうけたまふにやと、いよくたのもしうなん。
女御きみ、

神人かみひとのてにとりもたるさかきはにゆふかけそふるふかきよのしも

中つかさ、

はふりこかゆふうちはらひをくしもはけにいちしるきかみのしるしか

このうたを女御のとも

もろかつら

うゑもんのかみ、権中納言になり給にしそかし。のちも、ねこのつなのみ思たへせず、しのひかたくて、小侍従をかたらひて、源氏の院にをはするほとに、女三宮にたいめんしたまひて、あかつきいて給とて、カシワキ

をきてゆくそらもにしられぬあけくれにいつくのつゆのかゝるそてなり

かへし女三宮朱雀院皇子

あけくれのそらにうきみはきえなゝんゆめなりけりとみてもやむへく

うゑもんのかみ、かへりてつくくと心ちさへあしく、なかめふしたり。わらはのあふひをもちたるを見て、ゑもんのかみ、

くやしくそつみをかしけるあふひくさかみのゆるせるかさしならぬに

わかうゑ宮を、みたまひて、

もろかつらをちはをなにひろひけんなはむつましきかさしなれとも

むらさきのうへ、れいならて、たえいりたまひにけり。えならぬけんさとも、「さりとも御物にけならむ」とて、

かしらより、くろけふりをたてゝ、いのりたてまつるけにや、ちいさきわらはに、ものうつりてのゝしる。「人のけて源氏の院に、もの申さむ」と申せは、きゝ給に、れいのみやす所なりけり。さらにしむし給はて、「しるし見せよ」とありければ、申ける。

わか身こそあらぬさまなれそれなからそらおほえする君はきみなり

すこしをこたり給へる御いとま、ひまあるこゝちして、せむさいつくるはせ、いけはらはせなとして、見いたし給へは、いけのはちすのつゆすゝしけなるを、「これ見たまへ」と申給へは、むらさきのうへ、

きえとまるほとやはふへきたまさかにはちすのつゆのかゝるはかりを

かへし源氏院、

ちきりをかんのよならてもはちすはにたまるつゆの心へたつな

よろしう見へ給へは、ひめみやのをはするところにわたりたまへり。かへりたまはんとするに、女宮、「月まちて」この給さまのこゝろくるしけに、たちとまり給。女、

ゆふつゆにそてぬらせとやひくらしのなくをきくゝをきてゆくらん

かたなりなるさまに、をきての給さま、いとくをしければ、うちなけきたまひて院、

まつさともいかゝきくらんかたくに心まとはすひくらしのこゑ

かのすさくるむのないしのかみ、あまになり給と、きこえ給て院、

あまのよをよそにきかめやすまのうらにもしをたれしもたれならなくに

かへし、ないしのかみ、

あまふねにいかゝはおもひをくれけんあかしのうらにあさりせしきみ

廿一 かしわき

うゑもんのかみ、ふかくになりて、ひめ宮に御ふみまいらす。いとしのひてくるしければ、思こともかきさして、

いまはともえんけふりもむすほれたえぬおもひのなをやのこらん

ひめ宮御かへし、

たちそひてきえやしなましうきことをおもひみたるけふりくらへに

「をくるへうやは」とあるを、いかてかは、なめにはおもひたまはん。ゑもんのかみ、またきこえさす。くるしさに、ことはもつゝかす、とりのあとのやうにて、

ゆくゑなきそらのけふりとなりぬともおもふあたりをたちははなれし

女三宮のうみたまへるわかきみは、ゑもんのかみの御こそかし。源氏院、しとねのしたのふみ、みつけ給てのちは、こゝろのうちのみ、しのひ給て、ほにいたし給はぬにつけても、この宮をいたき給て、女三宮にきこえさせ給。

たかよにかたね^セはまき^キしと人とはいかい^ハはねのまつはこたえん

こゑもんのかみのとふらひに、一条のみやにまいりたまひて、はかなきことなと申かはしたまひて、いて給に、さくらの花のおもしろきを見て大将、

ときしあれはかはらぬいろにほひけりかたへかれにしやとのさくらも

かへし、みやすところウエモムノカミノシウトメナリ、

このはるはやなきのめにそたまはぬくさきちるはなのゆくゑしらねは

大将、うゑもんのかみのでゝのをとゝの御もとに、このありつるみやすところの御うたをもてまいりて、みせたてまつり給。おほしなけくこと、かきりなし。このおとゝ、たゝうかみのはしに、

このしたのしづくにぬれてさかさまにかすみのころもきたるはるかな

大将、

なき人もおもはさりけんうちすて、ゆふへのかすみきみきたれとは

弁のきみといふ人、

うらめしやかすみのころもたれきよとはるよりさきにはなのちりけん

大将のきみ、かの一条の宮に、つねにまいり給。ことなきにしもあらぬにや、かしわきとかへてと、ものよりことに、わかやかなるか、えたさしかはしたるを、「いかなるちきりにか」などのたまひて、しのひやかに少将のきみといふにさしよりて大将、

ことならはならしのやとにならさなんはもりのかみもゆるしありやと
少将のきみ、

かしはきのはもりのかみはゆるすとも人ならずへきやとのしつえか

廿一 よこふる

朱雀院には入道にて、ふかき山におはします。ところにつけたる、たかうな、ところなど、六条院の御あつかひのひめ宮にたてまつり給。「ふかきころに、ほりいてたる、しるしはかりになん」とて院、

よをはなれいりなんみちにをくるともおなしところを君はたつねよ

「いと、かたきわさになん」ときこえ給へは、ひめ宮の御かへし、

うきよにはあらぬところのゆかしくてそむくやまちにおもひこそいれ

たてまつりたまへるたかうな、このむまれたまへりしわかきみは、とりちらし、くひかなくりたまへは、六条院は、「いと、ねちけたるわさかな」とて、

うきふしをわすれすなからくれたけのこはすてかたきものにそありける

大将のきみ、一条宮にまいり給へり。ことを、いとをかしうひきたまひて、ゐたまへりけるに、大将まいりあひて、ひわをいとおかしうひきあはせたり。ひきやませ給えるを、せちにそのかしきこゆれば、たゝものをのみ、あはれとおほしたり。大将、

ことにいて、いはぬもいふにまさるとはひとにはちたるけしきにそみる
たゝすゑつかたを、すこしひき給て、ゑもんのかみのうへ、

ふかきよのあはれはかりはきゝわけとことよりほかにえやはいひける

はゝみやすところ、かく露ふかきところを、つねにわけいらせ給ふとて、昔ひとのもてならしたまへるふゑを、たてまつり給ふとて、みやすところ、

つゆふかきむくらのやとにいにしへのあきにかはらぬむしのこゑかな

大将、

よこふゑのしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね

大将かへりたまひても、このふえをふきすまして、ふしたまへるゆめに、こうゑもんのかみ、このふゑをとりてかくいふ。

ふゑたけにふきよる夜の風ならばすゑのよなかきねにつたえなん

「思事ことに侍き」といふ。ひめ宮の御はらにむまれたまへる、わかきみの御ことにや。

廿三 すゝむし

入道ひめ宮、くたくつくり給。源氏の院、

はちすはおなしうてなとちきりおきてつゆのわかるゝけふそかなしき
かへし宮、

へたてなくはちすのやとをちきりても君かこゝろやすましとすらん

御かたに、すゝむしのいとおかしうなけは、院も、「をかしまものゝこゑかな」との給を、

おほかたのあきをはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしのこゑ

「いかに。おもひのほかなる御ことにこそ」とて院、

こゝろしもてくさのいほりハヤはいとへともなをすゝむしのこゑそふりせぬ

八月十五夜、人々、源氏の院にまいり給て、あそひたまふに、すゝむしのつねよりもこゑまさりたれば、「こよひ
は、すゝむしの宴せん」とさためられたるに、大将おはすときゝて、冷泉院、

くものうゑをかけはなれたるすみかにもものわすれせぬあきのよの月

にはかなるやうなれば、とまりたまはん。六条院、

月かけはおなくもるにみえなからわかやとからのときおそかはれる